





芭蕉袖草紙下



浪速 花屋菴 尚端 披

元禄四年

此巻を名意に云はれり

三月廿四日

大伴孫の子れくくえい何仁

猿蓑

新下町末代

芭蕉

梅月某中この言はとうけ

まわたらしれまはあけの乙品

雲雀鳴小田よ土丸のふりや 珍碩

志とく移入て下されにん 素男

行隅は虫遠くくえと言ふ 初



二階の客いたくまたる秋  
菘 故やる弊の秋いたくもせ  
男 稻の葉のひのかふ死風  
碩 煮んのかうりね熱る乾麻山  
蕉 内藤びらんとていいたれ  
死 弁の刻の箕のまじりぬ小西  
方 碩 ともたるおのまじりぬ小西  
方 碩 秋の北とも死の北は福ひて  
初 雀うさうさう言ちもれ一声  
智后 懐よみ秋あそむる秋の力  
凡北 竹ささくぬ外の海つゝ  
初 陰の柄よまそくたうたう  
去来 灰すれちり流し菜の跡  
北 夏の日よは暑て帰る経  
机 正秀

店屋もの喰人供のひ習り 来  
汗ぬくひ汗のまろりの紺の糸 半残  
ろろれせそし死難のト 土芳  
大膽又思ひくつまぬ意をして 残  
身いぬ生紙のとりふかき 芳  
小刀の蛤母ふる細工もこ 残  
柄よ火ともん大年のお 園風  
こゝろこい思ふたうも吹花浦 猿雖  
胸うちあいせまころ肩衣 残  
此夏しうれぬ破れ衣 風  
碧油祓させてまじり存る 雖  
噴声の隣いちうた振つゝい 芳  
沫へいそ入目とこくめふ 風  
取ふき後とあらひる舎津 嵐  
嵐

雪ころ井の割下結  
花よ又こころけりも定らん  
雛の杖狐そむるころ風  
史邦 野水 羽紅

山深八万葉おこしうめの花  
こころのふる雨巾二葉の若草苗  
ま風よこころふ雛の羽の衣  
萩子  
ふ性こたかおこころれしは雨

重瀆

山巾巾字後の猿籠の匂ふ時  
そはぬ惜ま  
けまぬ道にのくんととら  
子紅大竹糸きもる力衣  
うね糸とこいしーかしせよんまき

落柿舎 二  
抽の花よむしけま料理のち  
五力ふやまおけける石をけの

猿籠

巾中ハおのしほひやる夏力

あつしーしとけしぬえ  
二書叫ともも家とん糖に出て  
灰うちわくくうるめそね  
は筋ハ根もえさしに不自由さ  
たといやししにせぬ服指  
草むし小蛙こはうろつる草  
落の芽しりよはけあり清  
庭んのおうろハ花のはむ時

能登の七尾の冬に任う紀 兆  
奥の岩赤りふるやそれ老とて 蕉  
中川人入り小舟門の後 未  
立ころり扇風をたふす女子共 兆  
湯屋の汁の貰の子供一死 蕉  
茴香の之美成る所とくあり 未  
僧やききく寺よりぬるり 兆  
猿皮のころと云成路の秋の月 蕉  
年に一斗の地子ころあふ 未  
五六本生本ほけり水涵り 兆  
足袋ふきとて後思はれ 蕉  
追たてては死馬の刀持 未  
洞市よりあふる一たり 兆  
戸隠子もむらむらひの賣屋お 蕉

と下中よりいづろき付 未  
こそしと草鞋成化を力おと 兆  
登坂ふらひは起り秋 蕉  
その中に物いふ外ふし 未  
ゆつとして蓋の合ぬす 兆  
草庵よきく居ていあ破る 蕉  
いのち娘一死撰集の沙汰 未  
とふしと品起りたる意成と 兆  
うた母のそていそお小町く 蕉  
何ゆゑは粥とるふし後と 未  
所るちとふれは度き板敷 兆  
よれいし小風送とる花の陰 蕉  
そ度動らぬ昼のぬいそ 未  
刀奈養山

曇りくれ城こけて出で此の里か  
舟ねよ輝の晴きらるる急  
歩り若持ふらふのく世で  
かこと此供のるときふし  
半時ほと板のわくたる舟入  
火のまらくしと燃てや、き  
軒口の鳥迄のはる音請か  
足身もより兄をあらむる  
知りまて畑えそく丹波山  
そらしし土ををれうり抱  
春、合、蘇の先をぬゆ斗、  
はくう様けしり、焼のさや  
ちくし方思居まそけ、た成とれ  
そとく、くしとせう、春のふ  
然

本末

砂川の流く流るく夕方叔  
高志とれしと粒あうつく  
百はくふ花の本陰は居たれ  
菜種おほらよ西城は晴れ  
比寺小楞嚴よりこそねく  
持場のはる本れむつ、さうる  
朝の内むとこに馬城退せやう  
條はさあけてけねりさす  
羽子板の寄て一方にあする  
備上さう入て毒るぬる  
茶小政と紹の十徳のを今うと  
月ぬさうのさこと秋は来にたり  
け夕ア方城時と取山よさう  
まの、畠のつ子かうつく  
然

下

兩年にわたり神の度りのとりにと童  
あつちまゝの市の小屋掛々  
はこゝろの化かす家さうりて道  
算と罫のふなる技考  
市局の郷下りとい細くみ  
塗と箱いゝもの出—入  
花の香のまじくやまぬさうり  
日こふ一日さうのさへほり  
明

俳諧集

かゝるまゝに振きて  
ちまゝの家か林を

ひしとあつちまゝの  
青きふはちほくまの  
飛城ははみ城名跡よて送て  
とれまて家城造る原中  
安世  
支考  
空芽

五ノ五

月の氣をぬきれ拍子系てあ  
大うと虫のふ城さうへかく  
傘城をほりて度るは城の  
空うとつる人のま  
さうりてとあ城さうりて  
おろゆるやうさう海  
いふさへん城付るさうりて  
ま向の風よ城と吹ふ  
さうりて把るまこの居る  
さうりて江戸のま  
さうりていひさうりて  
あつちまゝの事よ技考  
花城紅のまか  
あつちまゝの描さうり  
野  
土龍  
丹塗  
芽  
世  
考  
野  
兼  
路通

石塔破るよとして今朝も  
 背丈ヶ伸たる悴き所かよ  
 古くわ人形仲間寄つてふる道  
 互端出—てころいぢりり  
 須帯小銭をここえて尤も  
 名深の町の辺付もなる  
 明月の旗もたつたる実東里指  
 こと—い—い—後ろあらむ  
 菅葎のまうらうと時々林野  
 いつ能りても待ハ上よあう  
 女房まぢく笑ひぬえ惜—  
 瓦くれ武士の二番—も  
 土手と助の女系竹は枝小切たう  
 田のま時よとやる富士垢離  
野

故の居れをよもれてふいふの力  
 酒—何と名残付て吞る  
 病ぬいて結白めあつた花を  
 とも—へ向くもそいそんり

俳諧集

及肩

秋立てて于此—に雨気—  
 表居ふ—えて戸然—と力  
 早稲葉秋を今仕止用もか  
 人—て暮る—の教下作  
 腰柄もさ—い—く—又ある田舎様  
 ま—り—つ—ふれ—け—ころの風  
 番提—船の—けらと持つ人  
 ち—ん—の髪もた—ぬ—寸  
 居—あ—ふ—難炊時の—ゆるれ  
探志  
正秀  
之道  
琢碩  
道  
碩  
房



雷おらる娘のあゆれ秀  
 かけて至く合羽の末止に道  
 肌をく博奕くく先る碩  
 方の前酒よせいら近うえ秀  
 菜城前なりと寺の雁人志  
 上強又鶉ぬをむ白のうけ房  
 日和よむれ一そまの朝明肩  
 どりしと椽板ぬらよ花燈、碩  
 着ひつれたらまきの刈草道  
 幅廣木砂川さる長閑さま志  
 羽織そろゆる構多うく肩  
 行一と朝起あぬ五六日道  
 菜城休む冷おの味芭蕉  
 母親の仕立てえとる嫁入りおま秀

下七

意よと一出る旦那ふふし房  
 江戸店と持て在ふの門ま碩  
 麦城茶屋る香よ咽のうきし道  
 股川の万城雲にせられて志  
 音の小子に若井コダケ生出る肩  
 志んくし園の仔を屋のう肩秀  
 くら城告る秋のひよる肩  
 山畠の本筋くまつく風の音蕉  
 石地の板とさつらとヤ坊碩  
 情法と龜井の大工影して道  
 かく死と法と奈良の潜上肩  
 野の廣さ年し花を極ひるけ秀  
 かうしととらまのあけはの碩

俳諧集

蠅ふらふらとやふ所秋の目救ふれ 素  
 葛のうら吹帷子の 皺 芭蕉  
 小灯とさつらぬ秋まかけたて 路通  
 初して来たり 奥の 暖 犬舛  
 一通り又それと墨を 朝月と 惟然  
 たくそらうくと脊中打てる 来  
 打あけてまはまぬ人と思ひの 蕉  
 よ水流ういよ出る面うけ 通  
 お月一のとつれあうて危ぐれ 草  
 泣そらへたる芝の小さうれ 然  
 夕言言させる落して立り 来  
 泥うちこくは早乙女のこれ 蕉  
 石佛いつれ久ぬいふうり 通  
 牛乳骨まで牛乳らとや 草

酒の嘘かそ上ヶ不酔ふせり 然  
 室の八島またつひさひつ 来  
 陸奥の花より月のさゆし小 蕉  
 野のまゝ似たりこちの常 通  
 候ぬの友とゆいからまれ雨 草  
 我小力よ志むる巻 葉 然  
 おりの誰そと空に歌出て 未  
 疹してとる泣の女さよ 蕉  
 斤定は拾ひて牙の古竹履 通  
 あと能ふと雪よ啼る 草  
 供多のくはましもかた静之 然  
 畑の中よふる 稲 法 未  
 へは是井と懸遊が家方板 蕉  
 松る 鑿のええぬあけさ 通

やけいけふちあうちか教へそり  
所々廉の外西にふぬ侍然  
子親了るくつて通うり  
りつりの中よ下ととや桶蕉  
けつも斤例斗りまそりい  
倉芭はとく落葉のうへ草  
俳よいかくこの花城奉る然  
菜城ほむ餐の白た曙未  
星合集

芭蕉

牛部屋よ坂の多ふり秋の風  
下櫃の上よ蒲萄たかほろ  
路通  
酒志ほる早まうりに月られて  
史邦  
鹿田み本虫あうりきり  
丈草  
くね井にまきしとるそみ床  
去未

下九

蓮のうとと葉のあひらけ  
野童  
後扱もまこと新らしくそつれて  
正秀  
北川の奥なおむそとと蕉  
体も日も癒ふらひの教ふく  
通  
遠くむ鼻の隣いふせふ  
邦  
ふま干から裏打紙紙は見え  
草  
いつも痛まうり秋の下枝  
来  
秋立て又一とさうか子け  
童  
落緑たかく僧堂の  
力  
秀  
かふれか城かろ筆れおれ  
蕉  
痛よほくもて浮世さうり  
通  
あゑるもまにふらぬいあぬ記の  
邦  
畑ふすくまそ苦しと  
華  
人ん左陸の咽いとえさ  
来

産方すてしるき 什 童  
 うん事孤過井と流る際も 秀  
 狛買 客のころ衣し 蕉  
 硝子と減り際えさる茶酒 通  
 摘笑いむうー 後ふし 邦  
 叢と麻ふらさるり所僧 草  
 明石の塔の太鼓寺出次 童  
 大いはいほーさるる船あし 秀  
 ちうーに似せぬ磔いふ死 通  
 ちるされて女の中村音流り 蕉  
 教くられぬ志のひ路の力 通  
 句い水志さるるくふて初嵐 邦  
 中こと鼈のころら進ひ出を 草  
 むに掛し抱えさるるかーと 未  
 下十

油あけをぬるおやせたり 童  
 鶯の花よい麻とさうて 秀  
 柳と風のたをけこそ吹 秋華

産在銘 人の経をいふこれ  
 己の世をいふこれ

色のいへい産字ー 秋の風  
 いふつーさうーおくのきさよ

様簍 九龍

灰汁桶の糸やまらうねしを  
 あらうかどうして青麻とふ秋 芭蕉  
 新巻まおししたるふ月歌よ 野水  
 ながしつゝ娘ー十のさうつ死 去来  
 千代物つとあはるるいふりて 蕉

うんいその音ふあしをふら 北  
あかり出して朧よあやう春れ約 来  
厚那うさ根よまらぬまら 水  
夕飯よかまことと喰へん風草言 兆  
蛭の口をさうけてき味んれ 蕉  
お思ひりういさうをれて休む日よ 水  
正せそーいん殿りのぬま 来  
金得と人よあやうあれやとさ 蕉  
こり風呂まきの音しりの力 兆  
町内の秋しふけりあやうい 来  
何とえりまもあやうい 水  
花とちるあやう西まう衣言 蕉  
本音の歌言小まよ言つ 兆  
うらやらふ陰はと入に叶う 水

紫ととぶの株とあけけら 来  
冬々の荒ふあうたういし 兆  
藤の池をよ有明ーおく 蕉  
とさばしき女の智恵もろくあて 来  
あよあひつれ狼のもく 水  
中人あお雲の萱根の所願言 蕉  
人もこそこれーいりそくの水 兆  
うそはまに自願をまてん 水  
すくも大事の飯ととり守 来  
提より回れ青やれていさだんれ 兆  
か茂の社ハよれあーうあう 蕉  
あうりの尻声とく名をふれて 来  
雨のやとりのまを迅 遠 水  
昼行する青踏れあうたうとこよ 蕉

赤くろくし水と葡萄のそくろん  
糸襦袢一ふんまゝにけり  
去ハニ力曜のそら水  
夕顔歌

古寺夜月

芭蕉

月えとる夜ようづくは魚いし  
庭の柿の葉もくの虫とふれ  
火桶ぬる窓の子陰と影ひめて  
別当殿の古れた枝折茶  
尾既のめてたぐりう二の葉もくしとて握小瓶、  
百家一めり川の水 上 白  
寂寞と系る人ふき茶沙堂、  
羽の四さう又いし置ぬとせぬ  
一むしちふられて跡る市のま 白

Fノ五

送るる子の飯つらむあり 蕉  
いろくろくし油筒 白  
糸ふと踏まてそつれいし襦袢 蕉  
力の前かさへて志ひろいし小巻 白  
拈横うらうやおけりうの生 蕉  
位敷る髪ハ黄きま秋くれて 白  
大玉の損松いのるは 宮 蕉  
云石いしの猿樂やうふれさう 白  
ハツトいしうまのふれ 伴 蕉  
雁うつら白根よせむひらうて、  
うちまふる馬にそくむ襦袢 白  
商人の腰にさしたる綿 伴 蕉  
およくまやをるいやしの教 白  
蒜の青れまうしつれぬいし隠し 蕉

黒さよよる水を月の燈屋 白  
 桐の声つらつたる香園番 蕉  
 空宮車さる空を馬に 白  
 美成仁よ粟の葉の風をて 蕉  
 といふ人細れ水の三日力 白  
 たるりの珠よの月几の星ま 蕉  
 さても鳴る時考ふ那 白  
 西川の空をの時の夕宵雲 蕉  
 小草ちりり世の遠かり 白  
 落雪のちりり晴なる日暮を 蕉  
 氷取えて捨る月の茶葉 蕉  
 空ぬて雀と入る朝のくれ 蕉  
 打うけ垣まいろししの蝶 白  
 十六夜集

下三

ちりりしと出てさよよる 芭蕉  
 赤成あつてまをまの法を 成秀  
 ひらりさしてまも持ぬ秋の系に 路通  
 獨こそけたる音の世を 大草  
 ころしと睡まはるるを以碎 惟然  
 城とくおとくまののけ 格胎  
 我ものまを測る潮のふり 正則  
 石のまを表の去付城よむ 楚江  
 鶴鶴の森とえりて競ひり 勝重  
 衾はくろし月ハ時雨々々 葦香  
 拍子本よもの冷ふ傍の打れて 鬼谷  
 流成魚たのむ谷の丈竹 正秀  
 月影よこれしまをる白の上 則  
 たちちりりしとさりりし 重氏

細こと死猪又秋成打うらふ 重五  
蟹の志く蟹を今敷又付たり 蕉  
年くしの花ふらひくむけ敷 草  
死しる車もせぬまの月 則  
老の葉の下の芥成吹散し 睡  
うらやう事のもうたふし 正幸  
ふけさけくみく世をきして 江  
うらへの心は偏してまる 水 苓  
汗臭さ人のあはれをよまに 奇  
さめてふくも輝き放るに 然  
風止て流るやうけさくし 舟 秀  
只一はしたのむ條もの 通  
はししいち死都の荒のころ 柴葉  
月又とあて小やうそ様立 草

下七

秋風よ細の器やくらの電 苓  
粟ひる舞の夕ア淋しと 脛  
斤論ふる子ハはれされ於けし 通  
身細さを丁の返さるとんよ 重成  
長旅よ銀土器成あうとた 柳流  
はくさくはひてあはれふたり 成  
職人のふあはれせる花の陰 強正  
南おもてよめくむ若叶 香

俳諧集 探志

所明の消ておきや響むし  
為さしやる庭のとねと 正秀  
様のを園ハ葉と存以ん 昌房  
子松葉のしめ力ふ 死 盤子  
産補のふ履と人よ並せて 芭蕉



すくくししたる奥の燈やう 及肩  
窮屈は顯發はうと申す 楚江  
書城をこゝに志すのの 秀  
山はとひ侍をたしむる 秀  
抱奇の集城編かりたり 蕉  
出来合のおふるまひん 子  
小鳥さびく川音を 房  
名月小借りそこひし 秀  
新酒の酸のほろしと 仁  
預る事ふたれい 蕉  
ものふるふとさふる 志  
咲花のふれよる 肩  
傘下せるも月の 房  
ゆる丁おのうら 秀

主

月よりよとぬるは 子  
鬼る斗り細よとる 江  
湖水成香て胸よさ 蕉  
隈家ハ物静ある 房  
麻のねとれはく 秀  
いさふととを 志  
名沙成をい 吟  
みちれくや 子  
くろよたぬ 秀  
おねと男 房  
たろくこ 蕉  
一振の笑し 秀  
降臨程 子  
風筋と 肩

馬よ乗りても 陸城をこける 江  
惟う花をこまき土竹の花を 房  
海うくえしこのころふるま 燕

三井寺の門たつとやうな  
柔らうな城こころいの方ねあ  
後明て力さし入る浮御堂

曲野年真下

乳通の下たさるおまを

九月九日乙州の二橋なる

とていふるなり

草の戸や日くれそれとれ酒

柔の家

下六

うるい乳箱の種かみれ乳

路

雁もよふまに海池の水 昌房

白壁の内より石打そめて 芭蕉

蠟燭の火城もろくろ力 正秀

たのまれて銀杏の産家うちあす 野徑

とてつめて乳紙まはるあけころ 乙州

園書にふかしくたる野影 晝好

身の水賣とけりて情し 珠碩

あこほつ乳まると秋の空まよひ 盤子

金堀よ入る洞のとはし 大里東

田の中よらうも鶴の打並ひ 探志

芝居の札の茶集めりふ 游刀

御嶽より雪籠もる自由は旅の道 秀

おまふ志むる帯の後ひ 通

内敷より二階の新杖つぎ上ケて  
苔妻の白ひのむせる下積 東  
かけろふや海まけたの雪うし  
東風吹くはる葉水の露子  
花よきの精ふくく移らる所  
豆腐上まにあけて客待 碩  
うらみあるを程我語りて細心  
思ふれと捨しもの姿見 通  
うはやうふとてもぬるよき此  
汐のさしなる方の上 廊 番  
暮の露若屋の境ま打の死子  
これおのりも我鳴りしは屋  
弓と矢もまこいふふ時を  
あつとさうし歩は出屋の念目 義

下

はとくをそそり森に膳成祖きて好  
扱のそよのひる筆の 篠 徑  
書いすの三史文通くし 通  
を録おーやるを直つと 疎 刀  
おさへたる胤成終よえし 房  
まよふ底端こむ居風呂の漏子  
内裡くつ目といふををを 碩  
燕の出入旅やう水声 徑  
後張集

存成中ねとて

針嶺

續ぬはとくふの時もよき風を根  
大とつとつとよきをれうくひと 如行  
一年の仕事をまにまにわけて 芭蕉  
垣中入舟とこしとをあり 荆口

うちつれて弓射よ出る有明の文鳥  
山々霧とさける小路を此筋  
秋風も鴉くけ後を長い通り左柳  
雪の上と草鞋てふむ如風  
幅幅の喰ひ破りたる紫雲は縁行  
念佛の声れ細うさゆる残香  
別を人と冷き小袖あたためて千川  
推そこちの恵のいとふき蕨  
奥住辰田もれ表に天紙を口  
糸着さしして物買にり嶺  
鞍おろすと馬の丸雪と手掛の筋  
佇よ方の涙て出さくくる鳥  
くつむの糸も菴仙せと蕪  
目利てまを送るくくり柳

葛れまのあとしてこそせうけと雲

千川をり

おくに伊吹城とてや冬さり

俳諧集

白雪の二人の子に松尾松後と  
名をわたり

それ白ひ松より白し水仙苑

芭蕉

土中ワヤのあしぬきを雪

白雪

初より公角あしをもの末て

桃隣

さやう時分の吹こさるこ

芦雁

洗灌のいと梅とさうふ春坂方

支考

お島小くくはるりくはるり

以文

藤ふはもらひまゆらと後を押て

扇車

仁洞や鼻声てかゝる

淡水

別踏の出とんたる小橋くさる 桃先  
 菘いとちりり作山小出と 桃後  
 水汲とよ月とさうれうたをぬと 桃鯉  
 三千このさくも定らぬあま 雪丸  
 花とく起るき坊主のたひ 雪  
 額やふれたる白さの右 菘  
 猪の追ひまてゆるたれあり 水  
 茶もつる春てりうも様立 考  
 茶もつる春てりうも様立 考  
 二方の盤のとりつけもない 先  
 たもつる春てりうも様立 雁  
 小細と舞のとれるいせう良 隣  
 思晴の演もかくとれつれて 後  
 雨よふらふを西の流し 丸

下丸

松葉の埃よ煮る 禍蓋 櫻  
 稚子笛哉首よをたる物の仇  
 雪降ることてりうも鳴 泚 隣  
 小ころしと生死温帯の夢きて 考  
 院も志く髪哉俺ひ経ひりり 後  
 ちりりりに鶴鳴ぬくは叔の方 丸  
 次子の磁ハ下よて持とそ 菘  
 あの家いそやう新酒と飲を 之  
 馬紫とる門の牛 垣 雁  
 丁おの途ゆとる一しれ 先  
 顔の志くして是れ小峠 雪  
 咲く花よ舞まれさくら瓜摺 車  
 村成とさんて肥るる 松 水

風来寺の茶室にて

秋意一心のしほりたる猿啼ふ

巻四

霜うつて名残のすすり時雨

三秋の静て草庵をかたけい

門人むすむすのまゝといふと

とくま

ともかくもあはれやおの枯尾宛

或は遠所賣の得をせふり

妻傳家鴨も鴨二何ううり

利合

元禄五年

愛宕菜

三平

霞弱より人の賣うりふか

芭蕉

吹あけらるる其の香をこれ

嵐雪

帰る鴨もつらぬ鴨も澤まで

七曜山城出づるふは記

蕉

町作り粟の集たる所細

を露も窪く溜る馬の血

雲

坊主も老しむとて退たり

蕉

土の餘はく神事かまじ

生條は燃はくもふり雨と如

雪

目覚めて孫る拙り切りけ

蕉

ま白ふほふさ飯をたけて

雪

かまこに秋風よこに眼

蕉

舌根の念佛は瘦る居士

夜雪

小塔の箱の中ふはけり

立蕉

拵てう川座政の船上より雪  
いさうふひんや焼乾の力蕉  
あたる花は根根が穿つ氣霜雪  
かけう入産ふ紐の下 蕉  
身のうちとも牙子けん結まき雪  
和泉のかつら桐の名取とる 蕉  
柴牆のふる記都は荒まより  
よこも漬こり推こ黒石雪  
年あつひのひてにせら秋風蕉  
髪をうる産む力まひこめく雪  
長門より西の對の根向して 蕉  
新よ玉又いれと冷ららん 雪  
山菜花の後の水仙梅つとれ 蕉  
雪は鶴をく貫う馬 雪

下ノ世

有りせん大仁の春ハハ新屋 蕉  
削て厚くした帖箱のさ 雪  
御謀叛もやう洞はぬ金けは 蕉  
杯宜う往よ神も言はく 雪  
花を鮑もその成思らん人 蕉  
惟こいしと田鶴つくらる 雪  
赤人も今一白の酒棧廻 珍碩  
かっけ喫とる衣の振旦 蕉

百指

芭蕉

雪や舞は糞とる塚の先  
月もまはるは昼のあたけり 支考  
やふ入いたく藪入とんせかけて  
なくさとなうと筆もつあひ 蕉

しつ馬方叔しと吐てま  
風も吹うぬふ益の益れつゆ考  
哥の舎海うう時肌きと  
羞子の寄るも居る侍  
くわくしと音とつおとまを  
尾の寄るまは徳願成就  
二三年たつのはあれそことく考  
餐城こやーてん遠る旅  
在あふハハ附るこれの方  
機をる統ハ角力五の事  
何ふの田ハリやう丁の写を考  
あめ<sup>ケ</sup>の星のすこことある  
所供と常陸の助も花と云  
白い修くしに子の船入リ

下世

かけうふの筆下例にもえに考  
ふ紙とまつて人の名紙向  
本振う出れおのしかりこま  
全紙あして後とほき  
松風のとんしと吹あす  
控まうあると告る川番  
湯ハ水のやうにふるる水桶考  
馬を足は苗ち紙あつら  
小洞市の時うらみたる奉  
痛らふこれハ女房と云  
しこに涼しハたの入うり考  
あの板うら板うらら建  
二の丸の光りややく余屍風  
雨もたうりて本の報



さうししと茶漬の飯食は迫  
に上り入て返と 茶 堂  
氏神の花も雪下に受さうい  
る辰成とえて伸る青柳

猫の意や心とと国のお力  
起しつうなふせんぬる小珠  
鎌倉と生て出らんおつと  
五月のや装こらら入葉のこ

吾の備物成うしやむ  
うん形よそと集のまやたしり  
ままの母七午余り七しこれ七月  
七日は身す、数万も七程

七株の二秋の子や月一り秋

五ノ書

星のおよ花火細く夏袴 其庵  
りてたとや星の一枚もあさるも 煮堂  
深川集

深川夜遊

芭蕉

青くてもあるへきもの瓜庵  
抱てふもたさ秋の秋嫩 洒堂  
昏の力撮の本ッ燈斤うせて 嵐蘭  
坊まらしらの先はにえるく 岱水  
松山の腰はけししの笑ぬらう 堂  
焙炉の炭とくさす川 舟蕉  
いとひ日の涙くまらる小豆粥 水  
ふとゆ掴んで洗入油子 蘭  
掛とに意のこころが持せし年 蕉  
葉を篇よるそらう下加茂の夜 堂

寒徹と山雀籠の中つり  
正氣女の正風のかるさよ  
月のとりにすの千ふははてき  
さあるこうりに沈おさある  
踏まゝ入る底の雪は落夜  
如智の所山の暮遅き空  
弓はしめとらうきさる息を  
暮るりよ馬上の海へ飛山  
町中の名居は赤くきんを  
吹もあつしに形を静する  
草足袋に地雪結まれば  
ふしあつりの古き屋の内  
玉水の早苗とていふつう  
我流くも紅鼓亦まら

下  
集  
四

山伏と切つてかけたる実け  
履もたねいからぬ世の中  
附合はぬ上戸とて春あけし  
さうをいしとあしを降あり  
のり物て和尚はれよ歩け  
たてこめてあり道の太日  
撲あけて水田も言る人の声  
遊斤はるよ繇提り  
不ひまの沈程給の長き市  
赤城のくまひ土間の  
系み針人らうもたらええ  
籠子のほうにこそ月さ  
三日方よ地は枯くそは花

名力や内よさしとむけりら  
十巻よの小粒にすぬ秋の風 許

深川集

洒堂

前株や水田のうらのらとむけり  
昔うくは日よ代りへる雁 嵐  
衣く山 蘇麻ハ馬のきうて 芭蕉  
糞軒けふる道のさうさめ 北観  
古哉場力もまのまよとみ後り 嵐  
去りてえ返る我客の笠 堂  
さし波の門の柱よおきて竹  
雲をのまは壁よ入る虹 蕉  
巻葉よ肩休やとるこりち 鯉  
瓜仙情とる房筋の傳子 蘭

下ノ巻

十六夜集

芭蕉

幼草ややうと日散ぬ秋は露  
青丸とととにこむる谷川 岱水  
野分より后村の智地定りて 史邦  
さしこむ力よ蓋瓶の蓋 半落  
塩附で餅く入柱の州 粘 嵐  
ふてこいり草の引もこ 蕉  
年暮ハ土持ゆるとゆふまは 岱  
飯防の落湯よ流するれ脊 史  
舟船の葉成たて並石の上 半  
舟さし帆よとまえる換りこ 嵐  
江の折のふくんよ暮り丸く麻て 蕉  
お虫中よはくると足 青 岱  
月暮れて雨の降り止む星明り 史

早稲の俵はほりくかり 五 嵐  
狗法にやうと乾きゆく秋の風 岱  
番は赤子代りたる小増 史  
花子のまゝと見えたる土 下 半  
細き井溝の月る若船 蕉  
三風よ大ニ由る藤芝居 嵐  
のこはからと伊丹もろ白 岱  
琉球よ形島よその表之 蕉  
是れこの隙のありん物 後 史  
又知くまで近付けり 未 史 半  
嫁入るとりやうとや 唱 三 引 蕉  
袖ぬらに深きとひくの盆 三 史  
丸もといひしき 哲 油 の 糶 岱  
竹葉と百石とりの門 三 史 半

下ノ世云

公事よ負たる奈良れ坊方 蕉  
傘とひろげもあへと俄あめ 史  
見る目も異なり半の月夜 嵐  
出店へとよも隠居れおら 半  
于物つとやう精進の朝 岱  
よ樹のまねれて夫と云つめり 蕉  
馳居とらとこむ板妻の上 嵐  
人ほくく毛利細川のたぢり 史  
聲も賢なり 雄の勢ひ 半

韻塞

十月三日許六亭

くふとうくも年ふれ初時雨

芭蕉

野の仕付たる夏のにう土 許六  
油実誠賣ん小粒の吟味して 洒堂  
竹の煮えたり秋の風をれ 岱水  
右の力業へ入ると古たみ 嵐蘭  
先ユまるとの候屋の物やう 執筆  
方々の候中水にまき 水  
鏡集りたる小鏡もと清 蕉  
標法む毎の氣をに照らす 六  
輾磔の目る奈良の入口 堂  
すかひ鏡いぬ人もやうと 蘭  
私追のけて蛸の食あそ 水  
膏園ハあふふる針の急近 蕉  
ふより萩の風をうたえつ 六  
八方の様おちろれ小服街 堂

下巻

燒山こえのそれ赤ちけ 蘭  
赤歌と畑も花の本陰とて 水  
ほくも長采よ熱の卵ころ 蕉  
まふうく強老の室まふじや 六  
當摩の懸城酒よ酔とる 堂  
こつらうと籠一本に書て 蘭  
ね意たぐも墨く長持の上 水  
灯の歌りつゝに甲 侍 蕉  
山時を平下紙出る夢 六  
旧連ハ紙の志く焚ゆるこれ 堂  
尻目よかよ小梁を展れ女房 蘭  
いっやうね無き志の記る妻 水  
琵琶城うくえて出るかろ 蕉  
五明ハ毘沙門堂の小方丈 六

舌のよりしぬ狐 やしき堂  
一とちも青死葉のふり落瓦 蘭  
藤踏み下る宮根路の坂水  
不長のうとす向もふての跡 蕨  
茶磨たりかむ百姓の家 六  
それのまやりのむてゆる跡 米 堂  
七十の賀の若菜 莖 立 蘭  
深川集

支梁亭

芭蕉

口切は境の庭をふつーし  
牛の子ん出と藪の初 支梁  
ふううのまは後へつた料と 嵐 蘭  
秋の形 万のさのし 利合  
猿人の影 二月のぬき 細 堂

下ノ共

大戸成揚ヶ小出る 緑 牙 岱 水  
鶏の卵のうと成産とろく 桐 寶  
あしたは抱を踏むむる 也 竹  
又とらさけ六田の柳は 枝 梁  
幾葉まきりく持大豆の付 蕨  
細うかるるにまはる 境の 合  
程うくるるを 坊の 振 堂  
らうしと 跡 落 したる 石 壘 水  
酒をも食まなり 安 紀 一 刀 蘭  
りやまの長門の園成秋たちて 堂  
を路よ 持 人 一 橋 の 精 梁  
西日入るまの 庵の 間 守 家 竹  
首の二葉のもえてはのめく 實  
とやことり 去年の け 柳 思 いたて 合

児よはとるく親迦堂のくれ堂  
嘆くめて去のふたうれ様を了  
多のふとくこら枇杷の蔭之蘭  
凡卑して襪ともかぶ旅の宿實  
清けよは連とこゆる社在丁竹  
目こくり小箱くるまはるまろ堂  
ととーれ房のあらふ川に梁  
水つきの箱の重小肩重し合  
とんまきたる門前の坂蘭  
皮剥の物煮て食ふ有れ力蕉  
上を吹くく白はりの御る實  
谷つとひ流しうけたる牛乳竹  
た日持こくり二ころかき堂  
おるも簾三つふねちりとも蘭

下九

盆よ美ふる丸茶の数梁  
花さうり御室の路の人通り實  
麦と菜種の野ハ綿之合

深川集

二百仰し宗繼う客剪茶一斗五  
五斗下戸ハ亭主の仕合ふろし

酒堂

洗濯よ客と名のはくまをさか  
綿籠ふらぬ冬むきれ屋 詩六  
ととついで隔子の後成はこひまを 芭蕉  
まいこし候七草もた川 嵐蘭  
力の色氷ものころ小箱賣六  
築地も深よ典茶のぢ堂  
相国寺はたんの花れ登る蘭  
椀の蓋とる茶路よ 筍蕉  
西衆の茶堂はるまゆら 堂

むくし一山井島位とる六  
とぬし一山井島の福成とる六  
東 退子の力と流とる六  
青湾の板と宿と露とる六  
ふらりの柱杖跡とつく堂  
系うけの枕打志とつく蘭  
ゆさうかば星にれ指蕉  
村は在田而のまれ着とる六  
塚のころいのもゆるる六  
虚々僧のゆと廻りまを六  
今ハ破走し今川の家蘭  
う流りけ後撰の風と流六  
すこすのころく正國ゆと六  
報多に流とるなる藍井と蘭

下ノ年

よこれし一徳よかふるまれ六  
馬くく成侍とつた井戸の流六  
力扱よ成成流と探出し六  
火焼して破あてかふる六  
中川積とかくる年のお成六  
うのころと門の尾小を流六  
さる観音いし時成とる六  
今とやるとる流ととる六  
奉りの陰と誰と流とる六  
教垣と本きり守ゆる六  
日ハ赤く出る二月朔日六  
とくのたよ伊勢の蛇の流六  
物樟若やく宮川の上蘭  
鄙懐紙



月志ろ残いそくやくの村時雨

千山

小松のかしらそろうふ冬山

芭蕉

雄麻と入巖の透きぬき拵

此筋

水やう白く海へ出る川

左柵

洵ろへき流の酒屋と一里程

酒堂

襟よおし返むれとくひの松

海動

あふてふくさむ日あり草力雨

岱水

あう際うろく南天の花

川

笠とれの前髪やむき鞋掛

蕉

かきこもきよいさひ大酒

嵐蘭

高館ハ年穿鑿よあうて々々

柵

水風呂立る雪の陰り出

筋

ゆるさ葉をれくさ葉と纏

動

下無

傷寒やこれあうぬかぬ水

伊豆の海舟は船と漕入て川

一夜の法よ宗有定る蕉

鄙懐紙

本柵しよりりる万かそ死入湯

荊口

毛と引く鴨どのとる俎板

酒堂

魚乞の中振うに袴着て

芭蕉

どころくしい木履くく及

此筋

梨の枝おりの成るお言われ力

左柵

桶よとことき芋売のあく

大舟

秋風よ架こしらゆる巻付荷

千川

嵐のとたる深のろ

蕉

六月の目も照くまき木柵の本

堂

と板のへりる縄ゆるまる

柵

か袋袋本つうけて供さる浄土宗 箱  
箕面の漕のくもろ山降川  
幾ふせの弱多ねの紫花陰舟  
俵よ豆のまふ成しこく 秋堂  
力代も小くくさ里ねこれ遠川  
手保ひくく馬の吸くろ筋  
夏ハ今秋よりこれぬ花盤 押  
夏の上よのほる湯 冬 義

卯をさかかけうりなす橋のく

橋成就し

ろくろやいりてふむ橋成  
雲し小深くはむ位居これ  
力花の夏よ針たじんまけ入

下巻

桃實集

兀峯

水多よ女いたも成思るを  
白紙文よ芦静なり 邑蕉  
中級の醜も以よ捧抱て 洒堂  
力の徑よ背捨ふらし 峯  
鳩吹く櫃の夏はくくろし 蕉  
板の埃も小赤産かさぬる 堂  
う簾戸小袖にあう花日の掃り 里東  
君いこれしふてしこの時 蕉  
後出して土器ふるふふたより 峯  
御念取して孫余とたけ 東  
門し小明日の傍と配り玉 堂  
芭蕉ふとくは次塩 箱 峯  
山陰城やれよ出さる牛け尿 蕉

梨地あけ死児のさけ頼堂  
名月よき井の搦杖一すさけ東  
今年の茶以背負曉し化蕉  
花よ来て我名の佛 徳堂 堂  
まいかしぬ之猫の人高東  
陽火の庭よ搦へる株おて 峯  
たぬ夜よ葛蒲打呈 堂  
そんとりん腹の後の物おせし 蕉  
急のあわれとみよや鶴胸 峯  
株への國い志まうは田は後て 堂  
英徳の伊吹てさむ死秋風 蕉  
夕月よ新舞下と鈴の音 峯  
響かへはとる質の志へ入 堂  
麦飯よ交らぬ飯ととりかへ 蕉

下ノ世三

徳利引るる川舟の軸 峯  
帷子よ風もそくし死中小性 堂  
明日の返事と美智の久 其角  
うつろいよおれ句いと似せとる 峯  
人目よたつし引かくる珠 教 堂  
一息よ地を控視の花さうり 角  
膳よ日のこととまそわくめく 峯  
雪ははこらのるよいしひ 吟 堂  
累且帳とくれあれる 角  
句兄弟

十二月廿日昇興

芭蕉

あよりて花入さくれうを 椿  
侍こむすれくし雪の宿 彫堂  
目よたぬはしうり看とて 晋子

羽織のよさふり 雲 結人 黄山  
 夕方のたふさけふるか人 柳眉 桃隣  
 出づりりをととて秋をせし 銀  
 網小成る衣いひりゆる 槌の音 棠  
 肩てやー たら 果の 親 晋  
 受しとよ 菜 種い 外て けし 花 杏  
 茶と煮て 止を 伯 漱の 字 寮 蕉  
 下張の 反古 又こく 枕して 山  
 洗めたい 猫の 牙 爪ひ さら 来る 隣  
 ひつー や 穂よこー 止 ぬれ 白 棠  
 硯法 度し 色 せ せ ぶ 晋  
 三寸の 残し 紙ー たい 唇 隣  
 十一つと 違まこ せ ち 教の 力 晋

下ノ世四

蕭と葉しにきとつる 寂 棠  
 夏ふる 和尚し 友 哉あ さい 唇 杏  
 鳥とよ 水 瓜 上る 相 戸 掘 山  
 山 考の 水 けい ぶ けい けい 辞 なり 蕉  
 賦り かくる ちの 吟 歌の 下 園 晋  
 うけ むくい 様 庵る 床の ぼ 山  
 たし いぬ ぬよ 昼の 竹 待 杏  
 氣とよ 曹 洞 宗の 音 又 隣  
 集す 冬ふい ちよ 瓜 ちく 棠  
 了ぬ ちうの 主人よ 意 紙 初 晋  
 ちとよ ち ち かくと 傘 一 蕉  
 松らー じ 星い 皎 けて お け 方 棠  
 涙り ちー ち 声い ち 記 石 山  
 松茸 哉 近々 路 ち ち 山 晋

そくさいふ子ハ下シにあり 菴  
老たるハ脚羞う外に畏リ 蕉  
花の名よくとこと、揚貴此 棠  
附さー哉中にこいそ拵ぬ之 山  
こころの氣の跨く三弦 藤

晋子

小傾塔りてふらんどうれ書  
改中こころ小飯りの董物 漢石  
吹そくは猪のひたのいくらみて 芭蕉  
かちろころにながし 孟 晋叔  
義盤残ひそく小弾く市中 盤子  
いつも自由よ出湯のり水 史邦  
井陰のまこーにあー小月れ書 去来  
胸とっりたる早稲の朝風 文叫

下巻五

恰のいさかひあれとーれれ

え禄六年

人もそめまや鏡のうーれ松

去来のしとく

芭蕉のこーそくすーれ花

春と秋集

曾良

衣裳して梅つたむる句これ  
蝶々つらーむ入り口の松 塔山  
掃きて消る雪をわかくらん 路通  
石のく月こに墨残さうりり 芭蕉  
月移るまゝのそく死踏きて 山  
のたうつ株のこつる芋 畑 良  
後の子う詩意ならぬ秋の風 蕉

らいつね際干を空の面かけ通  
あちとふく屋狭うたる咽の脈山  
寺の物ゝる罪の你さよ良  
振るこけて枝あてられぬ大戸通  
聲の利敷と町よひらり人山  
子能りの酒の味も附に多良  
有も今を智と人騎馬市蕉  
物衣をさめこれぬしに赤れて通  
我おそれぬ成るは是也や蕉  
花の血室の向よ泣せけり通  
古栗の鳩の子ひいたぬ夢良  
講堂よ信をふくふまはくれ山  
流よつる悪あゝのれ良  
形代よまふ若ふくはは連代蕉

下

こほろく星のをくれ長風通  
やねふともはれどろ不破の雲良  
極おくれたる田中イミカの小田山  
ほろよはせせてさよや晴らん通  
我ものおまひう死せ一人蕉  
は急城いそんととれを吃いそ山  
うたれてくる中丸戸の雲巻良  
於よ月城と伝不との星な良蕉  
ほろのねろよ谷の雲来通  
火城禁て岩の洞ろもを乾良  
咽城守よのこと頂れ蕉  
おとろふる祖父の自養と氣にうけて通  
折よのせいの草のくもの山  
入よて余りよ野の花の奥蕉

何れもやしむれさくま山

俳諧集

野坡

五人技拵とて志こころ柳れ  
 日さうしに雪の 音 芭蕉  
 猿安の力成ちうに山こえて  
 そろくぢける維子の舞ひ 坡  
 何たかうあつてもあけぬ山の窓  
 徳利は酒よて酢と買ふり 蕉  
 丸三年旅うし猿へ旅とて  
 曉の云本今のふぢせぬ 坡  
 玄白よ松も栢も名の真  
 うた世の屋とたえて後す 蕉  
 瘦腕よ栗と一曰搦け舞

下・林七

菽入をよとなふられて後 坡  
 鶺鴒も頬うろろ秋文て  
 羽うちいを雁よ有乾 蕉  
 けしにことし酒成試ふ  
 ちこい佛へ朝のと日し欠 坡  
 咲く花よ十府の菴菴あまふく  
 こち茶畑も摘し月さる 蕉  
 さうしとよとまぬ水に雲の風  
 陰の糸よゆ入日ちらし 坡  
 けさうくせよと子供を白眼  
 ちき味雪の灰ふきこひひ 蕉  
 一握りくこあつり一亩 坡  
 りんも松雪のころうと除 坡  
 お齒黒ともらひは中戸に配

ひつしの栄耀今ハ昔よやじ  
市原にそころつとふくひ子  
非おむよハおらそらうとい  
力教よ小春仲宵の誘ひつれ  
蕎麦うつををほむる肌寒  
とろくしと相のまふるよ水神  
書付てあつ金の積古日  
漸とうたおこされて髪けつ  
猫可堂ころる人を忘し紀  
下の花のまらぬユまらふ  
帚目のうつよきしの煉  
俳諧集  
水音や小軒のいさむ二俣  
折もととる岩の刈 株 芭蕉  
湖風

下ノ世

乙つひところ乙切まの前出て  
刀の柄よくふ状 箱 利牛  
食傷の服紙ほりう朝の力  
豆麻てあそ入盆の友達 蕉  
小のすく小家ハ本様のおし  
独一文よ下駄成借る道 牛  
菟弱の色のまとも泣けぬ  
糸のよをえハ殿の敷 陰 曹良  
うんろ母との子たふこと「痘の跡  
右とさるふころ殺成はる 蕉  
小さうでも砂場と歩く系馬 牛  
冬蝨と焼てたれ、食そのめ 隣  
力教の白の俳のまをえん 蕉  
盗人へる昔の報しりも 蓬



杳掛の疎不のうふくしの雲良  
り人も世合よ蒸うつ細風  
鄙懐帝

子中

芭蕉

傘ふたりかえたる折うね  
つらままむ塀の籠さし  
たけろ力いさく巨燧のそを  
候の去又礼いつてやる  
せんたくとてう新のすう  
登らまてうと出と及もの  
湯入り流のうう外と流世堂  
夏秋の故のねー合て  
ていこりし廣葉の茶室を  
々人も異よあきを出てけり

下九九

伊勢のはれ又夏替成してふ  
ねろーのう道心のか法  
金拂ひ衣月すてい返られと  
のけり日和の浦の初丁良  
秋もとや外てはうりし夏  
清波たうは子の髪結てやる  
在ふうすす出れは花咲て  
瓢の燧をとらふ麻種子  
まのええ十方それのど池と  
ゆ干ふ出もとてし精進日  
駕鼻のいさう酒を喫も  
先手搦由、おれうつ文  
むつーいふ尚字にきんを  
すうらちとちる籍のやれ物

従ふも母のついで来て宛々牛  
本郷ふきた川言ふ其の里  
足場より月の油及一筋に子  
麻退く入る月の睡たそより良  
念佛よ小こねぬいけつて牛  
に又十日よ居わくを暮野  
教法ハ麦も近たりをね水  
若くしたものを成と一ハ後賣葉  
男子とも程ひはそ又ぬをのけ野  
麻入もいや一年の去りほと牛  
切り採も若本いこれのうねをに子  
うけろよ居る思の細流良

高はふよ

田舎の庵もあんな家の子

件々好む

我の心あんなも似よ本家様  
うそ人の様もふら本家様  
おまけや言ひよこしたるやめ軒  
おまけと申すしれ末と申す  
其角

炭俵

籾屋

そと豆のくれ嘆きり麦の縁  
屋の水路のさる溝川 芭蕉  
上張りを通さぬをいれぬふり  
そととのさけべ流のさる中  
籾およ飛もいれ居ぬをいれ  
とたりと堀のころよ秋風 屋

こころしは霧の小る時出て 牛  
曉の仕事のユミさるるわたり 水  
時とよんふくもらこ時 風  
傍旅のもことせん家減きる 蒸  
風袖う衣明鳥の啼つたり 水  
家力流まると跡残るなり 牛  
縁けりあひまきりて 蒸  
糸の買ひひを試下て賣出ス 屋  
世まはさうやう花の静ふる 牛  
括し柳と今ふとて 水  
雲の跡吹さうしたる跡力 屋  
ふとん丸けこものおせひ居 蒸  
不在不隣と中のあるる 水  
とわち 諸王位上あうら 牛

月野

屋事のひささか出まじけまきに 蒸  
至とをれたる金減たつぬる 屋  
夏の傍よとくんで病れはせ 牛  
客と送つてさける 湯 水  
今のうらに雲の厚さをばし 屋  
年貢漸人ごとと養られたる 蒸  
息災に祖父の白髪はとほよ 水  
怪悪あらぬ七夕の 照り 牛  
君月のるに合せとれ芋畠 蒸  
さうししうささうさ 紙 屋  
ははに若の通りもいらはし 牛  
山の根陰の 花とさうく 水  
よこをたさあし風の吹出は 屋  
さうしの上よささ 花さへつる 牛

花はさうと女子さうりのほれきて、  
余のまかりふまたんほく、  
水

涼川をよみて

わが心とや風ささくは此の涼川 史邦

多賀の院をよみて

あさけのほろやをのぞくはあさけの垣  
相見やうらやましくわが友をよ

翁草

其

はさうやあけのぼりしをよみて  
おのれしと別 嗚呼止む 泣園  
舟はさうさうぬふにぬにさう  
舟下はさうさうぬふにぬにさう

其

栗丸を切る川上のやよ史  
ぶろしと舟のぼりぬにさう  
寺よ降きぬにさう  
雨さて白く咲たる花の史  
祖父ぬらりの葉にさう  
まこととさうぬふにぬにさう  
陸馬城かくる年 越れさ  
まこととさうぬふにぬにさう  
見世城町てとさうぬにさう  
狭捧杖戸塚の若の侍馬 駒 史  
服疲病のよさうぬにさう  
まこととさうぬふにぬにさう  
史のよまぬ侍史ありぬ 可

春風よ吹志ほくは夜袋衣史  
質よ流るる百両の家法  
ささくく懐くも顔も化粧て可  
煮しわくく白を垢の扱史  
孫土厭離寺ことろの鐘聲蕉  
舟島ほくもこの居屋友可  
うと事の佐後一番よと立て法  
かたろ我之河に我れ才子蕉  
かぢけくもねるふんねの別よ可  
秩とぬらとそ月の力能法  
所志とねの上へ風は身にて史  
老らうげも送ひまらる況可  
そくめとて並小院友の歩け蕉  
夏も小舟ふくくひとれ幸乙卯

雨ふれりりりりたのふほひ世  
従てわくちり家ゆつとけり  
塩およ咽うとかきる花さうり  
奈良いやりりり八言橋られ  
小文庫  
史

帷子の目くはくちり一貯貯声  
ぬき外成箱のことこ賃世蕉  
美の穂小おけけひとかた分て  
扱市ふ人のたうる夕月都  
木刀の音すのへたる居合ぬき蕉  
二階はくこれうととと裏板水  
寒さくくふ糸のトと吹きて邦  
石所おまは女縁ちの陸蕉  
よ細工小新着やれかか肩水

よひうせしも願ぬ小ね魚 邦  
 肌をた隣の朝茶のこ合て 蒸  
 秋入とこの助氣つこつる 水  
 桂皮は降りほきたる有れ方 邦  
 五位はあまの寺のいこつひ 蒸  
 折かしの新利刀も清くこつり 水  
 工焚家のことこつるお 邦  
 花は痛ん一とまきたるこ 蒸  
 小姓の口れきこつり 水  
 舟揚の内こつるむ氣虎 邦  
 馬の糞こつく役といこつり 蒸  
 仰入るに從權貸成おけこ 水  
 ことぬもこつり一箇くれ吊 邦  
 提うふまねおち一とまきたる 蒸

下五

けあたがきこつる日い志くれむ 水  
 友ねいのこつて床こつる坊者 邦  
 百里そのすいぬれをぬし 蒸  
 引割し七佐技木の行ねむ 水  
 こつりこつるぬ中ハ生こつる 邦  
 また何と線よ金ふ記方の善 蒸  
 こつるぬおれは時つれい 水  
 こつり補は提こつるこつる 邦  
 障子重なる有らつるのうひ 蒸  
 小こつるこつるこつる 水  
 二枚三日の終るおこつる 邦  
 考つてよこつるおれたこつる 水  
 百姓ちとむ苗代の障 蒸

老の忘れももてて四十雀

画價

新紙下のある時ふりあらし

鄙懐帝

仲秋兩懐故人

獨子

名よりやはくふく雨のはれをきて  
客よ花のたけぬ虫の青 芭蕉  
秋を越て庭不定なるものよ 千川  
すこ生ふれの酒のころろと 涼葉  
独たぬ鼻紙おもれ懐よ 此筋  
曲をい板の下よえり階子  
捕人の矢先のけふこまを振て 蕉  
養を乞ふより雪のちりりめく 川

り四半

入口の落敷きとたのひふり 筋  
とらり釣巻よ能板ととく 子  
糸こそり狭くい下りて涼 葉  
怪りよとふに洗ひ惟子 川  
伏見よてりふも豆袋の庭括 蕉  
飯の強きもらひふるく 秋 筋  
力教よ夏かと思へ鳥帽子 子  
殿の夢の古ひたる 露 川  
花笑ハ本馬の車寄ととて 蕉  
ほろりもたけぬまの彼風 筋  
鄙懐帝

いこよひとりを園つりめが

芭蕉

持船の垢さつちと淡粧 濁工  
近々小難改島びらき付て 伝世

肩のそらひー茶の持次 依  
又うせ八家根ふ日町懸る村ーこれ子  
青葉煮る子香の田舎りる 蕉  
おはさこのふと女房お魚守り水  
おまーいっ流る山吹の巻 蕉  
若皇子ふこーりて草鞋奉り 子  
渡ーの舟てまのなとせ 依  
鶺鴒の巢に赤とんどの重りて 蕉  
くけお曲輪掃のこを味子  
梅の枝下ーのひたる言れ力水  
映さる流る後のやぬ入 馬寛  
氷くう位ふるれ石成まけり 子  
うららと果てや琴おのら 蕉  
都く十日も屋とたさう 曾良

下り里

仇とたてくろ獨信の茹物水  
年礼と昨昨のふ今と係て 蕉  
烏帽子うふまの元も流る 蕉  
持つをぬぬをのを右にかたり 子  
よれい踏たる馬のめり後 良  
夏川やとや流る流と踏らうへ 涼葉  
通祖のやーう力成えさ 子  
我魚の千朱の芽成積とまぬ 蕉  
雁も大車ふくくけり又 葉  
眉挑るささく似し水後 子  
大魚の細屋望まうし 蕉  
お多く繋け八年も富貴の 葉  
冬のおふとにふのーう成釣 子  
お時雨六里のね代傳ひ来て 蕉



老うわしものい一抜たモし蕉  
相とととあ野の記を麻是子  
菊あくさ狂り 通蕉  
雪ふらハ雲車にあつて花の葉  
くる風さく後谷の細布子

出葉書

秋風よおて悲しと葉の秋

嵐葉の孤ふか思ふ

葉のふよと世秋の秋とちら知 其角

東野と野

入月のけとハ机の口隅くれ

鄙懐帝

其角

十と扱らつた文書はくりりれ

獨不

小神の糊のくくれ落書 曾良

焼飯と凡の粕俵にあげて 芭蕉

往胡麻のむくは四十雀つく 史邦

雨さきうらまの干反のまう合 抄風

俵うと流を風呂水水さう 岱水

さうまともや報うけにうらまて 涼葉

幸もとりハ栗拾の冥蕉

ね扱ととさみ扱ちる寺門良

ひらう娘のそこのこーら一子

葉のふともかくとぬきとしこ 水

なまこくらへん扱落るく 蕉

うたわね麻の衣の乾はりし 邦

雲十の言ふ新刻秋風

未度城行よかけたる紅豆のぬ子  
唐う地こらう一斤器の食つと葉  
えっけと華成くくむる初たの蕉  
常啼て旅よまことそら邦  
藤まよも指と動えいこの水  
中庭ちかむ見り膝え蕉  
貝まよまよ雇はるる程場空て葉  
顔よハ似せぬ燈政のぬ邦  
さうりふる隠居の牡丹えしゆ風  
勝こつして出るをるる子水  
ま清くむ教の近くまに養はは部  
足ハむくまてはるわりり良  
よこれたる衣は端が表装打たれ蕉  
伯母のほろく耐人の魚子

うへの力実極の梨の種りけて良  
枝もく葉の折りちいごよ葉  
を路を小土とをけく水空吹ら子  
くま細目よめる着屋良  
初産ハおもひの舟は安うて水  
信りし扇風を返とま言風  
葉小よもれ成かきしう空極葉  
とや鎌倉の道の名州邦

素堂亭

素師の寧成外を舟のまよ

信りし小秋菊散地

さうれいもや庭ふまれらる藤の屋  
葉の気味ふつとほせつ葉の中

桃隣

抽のいろや記わんたるこくはふ 其角  
とく留まらぬを産たしうらう 馬寛  
八子のるやあはつとくはあ 佑圃  
何多美のわらうにまき人菊の枝 雪良

竹田老人よ素琴成りて

うらうせぬ琴やほくぬぬれま 素堂  
舞つふよふはまのこや大根川  
体やまをぬくれいふはまの野  
神送られたる骨の土大根 西堂

炭俵

廿日休川石段

振うたあはれくまはま 儀  
ふつていやをまぬるまの 野坡

野坡

番通る假の小節城境うねて 瓶馬  
行元ふよ有城んをうれ 利生  
好おの解とたふぬ秋の風 坂  
ワリ木の安き四の家雲 蕉  
細の者通つとまにきうけ 牛  
聖さへんえはし一十八日 屋  
ひころはれいれは軍れ大事心 蕉  
冷氣の雪よ難後もせぬ 坂  
明きしむはう枕灯とあはれと 屋  
肩癖よころ傷屋の膏葉 牛  
上置れ干葉刻しうはれさら 坂  
馬よ出ぬ日の内て急ことる 蕉  
狗買の七ツもつうはる後て 牛  
堀よ門ある五十二るえり 尾

は晴の條鬼もも成る石を  
砂は暖のうつろ青 峠  
新島の糞も腐つく雪の上  
吹とられたる雪ころり水  
川截しれ帯一の水とあふり  
平地の寺のうを死骸垣  
干物と日向の方へいせせて  
塩出を鴨の苞日くあつ  
雪用ふうとせとたつる系  
まうと沙汰ふし小娘 産  
そとらこと大晦日も四の種  
を筆のぬむ状のけん牛  
津うくして信孝舎の信き久  
雪とたくとて海せぬ夕月 煮

風やきて秋のかもりれ尻さうり 牛  
狸のつ子の縁をひらゆる 屋  
ちうはらと糸の揚場の嵐 煮  
同黒糸りの連の糸らまぐ 坡  
どこもかも花の二月中時を 屋  
海炭のちうと揃入まこせ 牛  
炭俵

扶風

雪のねをれ口又まかちを  
日の出る麓の赤とまき 孤屋  
下着と一舟信くちあけて 芭蕉  
方とこころや大名の供 子珊  
牙ふあたる風もふつし 桃蔭  
栗とくくれて度と 利牛  
慈谷の境とれたる下江の水 岱水

おこーらーて 盤ふー賣る 野坡  
二とろろ 梅ふもふ門の 賑 圃  
馬の 足物 のさる 丁 花 沾圃  
井の 皮雪 結に 替る 夏 ぬ 来て 石 藪  
稿まふの こと 鳥の けし 杉  
よ 家 者 の 一 人 も 夏 ぬ 浦 の 秋 坡  
うつとよ 風 の こと やる 盆 盆 利 合  
骨 骨 の 方 成 う こと 様 大 工 依  
脊 中 へ の 目 る 兎 と 守 ぎ くる 桃  
茶 び ー ら ぬ 際 法 ぐ 上 ぬ 茶 圃  
川 ー ー ぬ ぐ に 小 船 いら する 菊  
報 置 くる こと して 氣 味 ぬ 紐 子 聲 杉  
脊 戸 ー ま づ れ こと 山 ー 行 道 岳  
お お も ひ た ぐ 替 ー こと 親 かり 狐

とて 集めて ぬ 多 ぬ 桂 進 日 曾  
餅 糸 と 搗 て 俵 へ ー ー 行 止 桃  
あ さ ー ー こと せ て 茶 代 の 札 依  
雪 舟 へ ぬ ぐ こと 自 懐 ぬ ぬ 沾  
隣 へ け て 火 成 こと ー こと 来る 珊  
ま ー こと け とも 佛 の 灰 へ 樽 と 貯 牛  
損 ぬ こと ー こと 賢 こと ぬ 杉  
大 坂 の 人 ぬ こと ぬ ぬ たる こと ぬ 令  
酒 成 こと ぬ ぬ ぬ 祖 母 の こと ぬ 入 岐  
と ー け ぬ ぬ 脚 前 の 旗 ぬ ぬ ぬ 圃  
次 の 小 旗 屋 へ け ぬ ぬ ぬ ぬ 声 牛  
約束 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 敷 ぬ 圃  
七 っ の 種 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 圃  
美 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 圃

男三つとよ蓮そりゆる  
畷懐帝

水仙のつるる瓜まにほるる  
啓通

雲の細目よふらくま本且  
杏杏

我猫よ時を猫通ひついで  
芭蕉

予こそれたる病濠の力  
龜仙

初顔よつぬ絲仇のつと念  
千川

仁といこれてつくる白鳥  
執筆

舞入よ茶亭ととのふとて  
杏

急よつ風の疎る興とち  
蕉

つれつれをささけて是ゆらん  
仙

取つともねらうと育つ然れども  
通

斤里小持つとつる布とつる  
蕉

解そかへまゝくふ力のそ  
杏

二ノ年

とらふしと葉度かしの世のそ  
川

一解あつる雁の朝  
家仙

おふしの佳處よそまらぬり  
通

乱りつ後いまつぬ年号  
蕉

猪猿やま下お見ゆはたの興  
川

雲の合衣をちくるまきりせ  
通

けふの上とうた世にひくうと  
蕉

彼岸小いとと産すもあり  
仙

りまら小中お我まよ何なるか  
杏

まぬおもひのまらゝ海  
川

え結のほつれておとる衣る記  
通

人の情成つたへ掲  
蕉

竹り出つ萩さく秋の意  
仙

陀律市とこと本なるは猿  
通

方の有亭を五持出よ 蕉  
 朽たる舟の底にうりけり 香  
 舟人の志をぬくとしぬつとて 川  
 志つらく俗を去るころつる 僧 蕉  
 相まじりていこうくえぬけり 通  
 塘の波に浮るうのむちと 川  
 あけ不の川流に上りたて 毎 仙  
 あらとさかいらばつる青柳 通  
 花さうり静る春と歌えこ 蕉  
 うくひと持ふ中と比のくち 香  
 鄙懐帝  
 芥焼やとこ臨の田井の如珠 芭蕉  
 挙てまき一卵産む 麩 濁子  
 穢下は指をむらにる多し 涼葉

下ノ巻

おししとびくくこれ披の本 蕉  
 うと力お干鯛俵のおまぐら子  
 ゆくむ牛もえとののさ青葉  
 暮暮の山村小疋成たれ入 蕉  
 援のこゝのころは連 滝子  
 求食おふ堀鳩の旅いらく 葉  
 掘こひくちふあぬるふ 蕉  
 月内うゝの孫よ吸指持てきこ 子  
 和田後又しも指 三葉 葉  
 腹乞のまていふ葉お荒らる 蕉  
 余ふよりうらうら方の校拍子 子  
 生くろくとあつて就身に雇はれて 葉  
 ねもろくことよと葉 葉の控 蕉  
 富ハふふ命くたつたの陸子





すしりら堅田の志願くつきえて  
野らる牛の方、起やとむる  
巽徳又寺の男のくちり入  
そ目よしとる、結のき外  
ど、後る所、まの口成、食を  
結又、徳とつけて、咄に、ま節  
田の中よほらせぬ、不れ、ま、し、  
芝よ、通は、く、力、後、ま、ら  
花の、所、徳、又、あ、な、あ、れ、ま、ら  
依て、米、さ、寸、ま、の、花、え  
彦、彦、ま、ま、れ、結、深、と、別、法、  
迄、た、ら、ま、の、よ、と、れ、居、不、  
裏、合、も、根、報、の、つ、ら、る、義、の、存  
ま、じ、の、跡、の、痛、む、ま、ら、  
蕉

年、ま、う、て、身、は、足、将、の、追、追、  
後、て、酒、の、む、系、物、の、不、  
ま、ま、し、と、板、の、風、の、あ、た、ら、ま、  
稀、ぬ、と、人、の、徳、あ、て、ま、ら、  
か、え、ま、い、親、よ、不、足、れ、ま、ま、  
く、ほ、ま、さ、く、ま、い、と、さ、り、や、  
依、ま、ま、ら、あ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
仕、付、て、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
田、成、極、ら、向、ひ、近、江、の、ま、ま、  
天、氣、よ、か、ま、ま、ま、ま、ま、  
續、様、表  
張、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
日、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
水、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
支、考  
佐、置  
芭、蕉  
芭、蕉  
支、考

葉升ましる葉といたく 惟然  
難うあつるとやそこれの力 蕉  
通りのふさふさ世たる秋 考  
まはは舞一居て垂たる箱の魚 然  
直藤の癖かふし子らり 蕉  
舞のまてふし世に世に世に 考  
中回りの状の右た右 哉  
朔日の日いここやう振るれ 蕉  
一重羽織う失したつぬる 考  
幸とんしね青まふの流れ楓 然  
山と門ある有ぬの力 蕉  
妙嵐留の人のかけまらり 考  
水際ひらる溪の心 翹然  
こてある紅三井の花の雪かき 蕉

トキモ

春持ひとりふいこく永き日 考  
赤ち風の又西よりふよか 然  
わらきに脈をた事からし 蕉  
後味の肉まひ今友を焚くら 考  
空花の沙伝もむこせられぬ 然  
大せつふ日う二日ある雪れ種 蕉  
雪こことけし中れとら及 考  
まら程のふけいけいれ出れ 然  
奥の世並い近年の催 蕉  
流しうし春のやと死石えしと 考  
志難いをこ座の正 面 然  
定まらぬ路のふとうふけぬ 蕉  
赤汗のとすう今朝うたの夏 考  
雪花ははらそとふれねの風 然

大工はうひの奥より出る道  
茶番もくくふりして帰る者  
かゝりて市の中を押し合ふ者  
けあつて流しに花のけもきて  
野のあつたのまごめけぬる者

俳諧集

いととまき引居るうれあ 芭蕉  
なうれの歌りお拓る水州 古圃  
看こつれぬ辰をくんとて 馬寛  
三味せんさける様のを食 蕉  
中ふたおそき喰ふはじり 圃  
食こそくる秋さむさあり 寛  
冬路しに泊る傍る下路屋 蕉  
大黄の葉の養をかさる 圃

下ノキ

力ぬく眩目そんしうれ思ひ 寛  
縁入甲斐もふさ本給物 蕉  
持佛堂六るをまに出る人 圃  
あつと成きてるる雑綴汁 寛  
流りの後十二点の相場あり 蕉  
伏見の橋も糸の名給そ 圃  
懐へたきて入る夏ね織 芭  
親仁くくくかかこりる 蕉  
力花のまきう社込いをる 圃  
陽をたきて解はるれまう 芭  
滝水のそくく流るるれ風 蕉  
門のたうのんるいと 接圃  
所の方ふ一村雨のふり通り 寛  
流より琵琶成出に扱する 蕉

鳥てふおほくともふくろくとも  
雪の細紅のふとさき巻く  
入りにねさぬしの井 龍  
佛舟前成神の信とも  
黒猪の小鉢ハ様のつらむ  
呉酒の茶碗と雲に出る  
かま彈の二階成居るにら  
力を隣ふ癒癒成さく  
行くあの一番えゆる花す  
暗く酔うくろ抽子の切瓶  
秋の空みくくたる旅人者  
奉加帳ふの附ぬこり  
不公儀は花さく山のぼる  
田舎の谷よふかまるる  
草

一、七

おきや水仙のまねたむはと

あゆもと十月ふはしりしる

え縁七年

まきまよふとやいせの和後

とちれくのりふ算紙んち海老

目下も中のかこやまれば宜

せねの親のふてくるはまが

食積やあふの白の捨もの

其角  
車たつや袋中の乳はど月取

草に梅成たりも 命 介我

まよ雪茶たのふあやいふ

山つらんとくくられの所 松風

ひくく只ふまはせとてつり 彫棠

改まり州 丁に秋よあけき 横川  
有明よがさ兒籍のよたてもの 芭蕉  
帆とハ合よ 弘法のよ多 仙化

鄙懐帝

涼葉

舟の言よは縁の非成さつりけ  
うと雪の雪さうぬこ 冬 十川  
門番の藤教よとむ力成て 芭蕉  
今朝むふ初る為裁の持 宗波  
秋風よ逆とたう 表在浦 此筋  
ひしと雨おハ目覚持ふる 濁子  
肌さく瘡のうと成下ふし 川  
よ本よ是成付て悔りて 葉  
渡寺の老尼ハひらう 葉子

下ノ本

奈良の津の内ふしとあれ 葉  
掛玉たを小袖のうひ成とみ 葉  
金の志願成園のかくとも 川  
える度よ源氏一紙の夏い 葉  
控てうとせ成やとれ僧正 波  
出来合も伊せの料成ハ藤相と 葉  
裸足てあさく 肉在の 砂筋  
朝方よ花のさり物せつたて 川  
日乾の履のやけとたき 葉  
石更む 善表の奥いさうはと 節  
地取りの株よとさる名苗ま 蕉  
く止ハ履ぬ 藤の言成まとい 葉  
寺のひらハ四五互の 秋川  
甲ノ方よ極木つと出た堤の波 左押

アとみ花を愛らん 軒葉  
先強ハ去儀 鞆の一繩子 蕉  
忌て居る肉は 帷子の下ル 筋  
うつらうつら 糸は 幾世も かり 川  
あられなきも かさ講の 歌目 軒  
三条の橋より 西ハ 一とれ 葉  
茶屋の二階ハ 酒の 樓閣 葉  
葉ハ 死魚も 大よ 年ふけて 筋  
恨の文を 流るる 琴の 子 川  
うれしハ 又来て の 日る 椽上 葉  
さるるよ こそ 心 きたん 月 葉  
諸雲 雀の 日 成 けに 移して 軒  
何れ 死 日 とも ころ せよ 次 葉  
炭俵集

了

梅う番ふの ひと 日の 出の 山法部 芭蕉  
ところ しく 維子の 子 なる 野坡  
家 夢 法 成 去の 日 遠に 去 葉  
かゝの 依 又 あり 葉の 出 葉  
青の 内 へ くと 世 力の 雲 葉  
寂 しく 秋の 淋 しく 葉 葉  
脚 既 へ 葉 すら 八 なる 葉 葉  
痕 残 かな たり 人 又 葉 せ ぬ 蕉  
系 良 通 ひ 日 しく あり 細 葉 葉  
こゝろ いた 母の あり ぬ 六 葉 葉  
乱 たる 味 嗜 あり 亦 あり 向 葉 葉  
ひ こと とも 出 こと 葉 葉 の こと 葉 葉  
あ も とも たら 尼の 持 病 とも 葉 葉  
あ ん こと たり たり 終 なる 名 葉 葉

初丁より南へ下地まで見る 坡  
土を相まよる 居合一 拔 蕉  
町流のぼらりと碎て花の陰 坡  
門て押ふく 壬生の系 仁 蕉  
東風に 糞ののきれと 吹出  
わく居るやうに 眩さうしめ 坡  
江戸のたむけの亭を登られて 蕉  
こちよといきと かく 白城 備 坡  
方ノし 小十叔の内 けののち 蕉  
桐の木も あり あり あり あり 坡  
門しりてたすめて 庭なる 面句と 蕉  
いろふたを きて 表へ へ ころ 坡  
お年よ 女房の 親ふる ちりて 蕉  
すこけ さま ぬぬ 浪人 坡

下ノ巻二

法印の湯 流成 おくる 湯 蕉  
縄よ 城下りて 青まの 出来 坡  
どのおも 東のうに 窓と わけ 蕉  
魚よ 倉あく 澄の 新 炊 蕉  
千も 鳴一 ねく 小ま ころ ころ 坡  
未進の ちりて ぬ ちり 用 蕉  
隣へ ちりて せと ぬと 連て 蕉  
屋風の ちりて ぬと ぬと 盆 蕉  
續猿蓑  
八九つ ちりて 雨ふる 柳 ちり 芭蕉  
まけり ちりて 留 けり ちり 沾圃  
おちる 馬も ちりて ちりて 馬  
肉ハと ちりて 晩の 振 ちり 里圃  
ちりて ちりて 日 ちりて ちりて ちり 沾

狗脊うれて肌をくくふる蕉  
隈掃もこころの風は吹れさう  
孫う諦も祖父の借掛蕉  
服さしよりてけしうの孫刀蕉  
條松志まつひくや録の段  
約未の小を一さけ賣ん来て  
十里こころの余ふ出わく  
経の葉に小路埋ておけり  
めさぬうつかと門の出付蕉  
いつくへう後の海はふたつ  
やめとやま出た京の及連  
有明よおくらく花のたてひ  
又奉よそろう人初のとへに  
春をそくやめ落れし他を  
蕉

下本三

伊勢の下向よへりたりと  
長持に小傘の仲をそつと  
くつとくつとくつとくつと  
禪寺小一日わさふ砂上  
観の角のこてぬ貫 穴  
演出りのよに儀成くく  
おまぬぬまのかくは内  
力は又候ま流の折と  
蘇の葉の名ふふさ  
むきて来て栗しえ梨も  
体信はしんかきのこと  
削やうと長刀板の冬の  
ちうとに空のこ月れう  
引きてを程よふ年とる  
蕉



とつと火入おおしに 薫  
花はとや残らぬまのたれを 見  
ぬくらの雨かける水の 里

とれおの柳のこころ志れ一  
ま柳の流はまたる流に  
くるとのや柳の葉つふさぬ漏  
れはぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

上柳

花つ五葉のほいぬ花えんま  
まらられて葉掃もまや時  
うたれ花やうと柳の及こ

芭蕉

紫陽花や菘城小庭の初雪 芭蕉

とつたるあひま 他ろ茶袋 子珊

初日の鶺鴒の子愛れ声やめて 杉風

出雲の相もそろうゝ親し 挑隣

かんしと有明を花をぬ柱 八桑

指握うけても人も又来る 蕉

径くくて任持こころぬ破れち 珊

とつとつとつとつ 後風の音 風

美堂の羽織ぬせて仮り拵 隣

かこころの身たりふと旅 桑

高ひしゆらりと内の納りて 蕉

心のうらさる下市の上 いし 珊

草臥のほいて八柱の気いじり 風

て日の方も未と細と親 隣

秋来ても畑の土のひびいて  
 きて雀の羽の生へうう声  
 ぬりしと足のうらむるは  
 ひらたい心のあたらちう  
 正方のとまうり 渡しの人  
 造たる像とこうんか 取  
 豆の酒麻てくく酔のほろ  
 五つのおれい降る女 房  
 け際も利上はうりはと  
 ずんまとい今朝の柄と赤  
 結構さうれとけふ切入て  
 又世より奥の家ハ引と  
 とうりて今年いとうと  
 けくはともふれまのまの  
 風 珊 蕉 隣 風 珊 蕉

下り

空栗けまうとうとほして  
 圃からまとうんまものり  
 いとうまう一曰はいて  
 薫くむむい隣さうあり  
 今のうらふまうりか  
 日さ雀の五器は  
 扈從流所茶屋の  
 小舟はまうり心  
 鄰懐帯

此は二若田老所代末  
 意徒す口田のこす

藤のさう  
 牡丹のくれと  
 むすうおも  
 雲ふえて  
 千川  
 涼垂  
 左柳

雪よりハ葉ふむ馬の冬も川  
出つとてやうき山の 砂 蕨  
吹ちへる枝も記ことこの社 柳  
いつも葉をよきる鴉の家 葉  
大のふれ歩きしぬほと旅肥て 青山  
稻むら白成借りふことや川  
あはれと曹洞寺れ夕法とめ 蕨  
願のひことうのほる方代 山  
生あたら餅ハ袴よ化られて 蕨  
貴子出来せはまつ葉—— 柳  
順礼の帰りに様のおうより 川  
えしうたこは行くへ 服さし 蕨  
たえんとふちるあはれの暖より 山  
ねへい板よさるるさ 葉 葉

下ノ本六

葉ふる臨飲の宵成意なり 蕨  
とてあたらへたう行器の給 此 蕨  
陽上りの浪衣する方とて葉  
雲の破きこ入るこ 風 柳  
こへいさふとてみ葉せいもかます 蕨  
雲のまうたへ何時のやま 葉  
萩畠年貢の葉に菊をへて 川  
酒屋の門をたたく力の板 葉  
人足の貫用列あよこごつみ 大 舟  
圃とてはまててををせたり 蕨  
蕨と目こころおしひ——死 亦  
降り出とるよよとく限はる 蕨  
隨方のこころたてををを信じて 柳  
火ふかやきこ——の金物 舟

院内より治川ちうに浪の聲  
あしとまて休む草 取川  
けまいつよりまをたのうけ  
姓のたのこゆる苗 代糸  
鄙懐帛

砂引

京兼

風流のまこと成鳴りて  
縁のまらち山知のたの雪 芭蕉  
御川よひた及全の傾とて 青山  
門遠へとる 醫者有は藤相と 曾良  
力のあつたあぬたも静と 濁子  
たは西風し今い涼しと 嵐蘭  
庫裡曉のま城未たる盆中 岱水  
ぬるま一つこのま心六 尺 曲翠

下ノ字

三つ目より人もまことしむ  
心もあるを後名よふと云 兼  
り院とるまをくた成り合 蕉  
本質とまうい不純をにとる 如誰  
入新も細そた言理の朝は方 良  
境とまうてやまうた人 山  
陣と隣は白成挽出ぬ 翠  
小筋の文成送る村し 子  
この花は判官殿やまめけん 蘭  
寺のくれま成ふた雪水 岱  
入物も田畑を似せて井は 兼  
流るとまけいを食成る 雪  
長うぬ懸人春の責り正 山  
まうと年くれて隠居るは 蕉

大桶とくく寝ぬおれまはにさつり子  
考まの給ふる人ぬ目振由 蘭  
まゝるをぬも紙いいて控ぬらん 雲  
おとけく面い名のそよよこ 葉  
あゝまの風呂に付る仔細は作 宿  
とつ目糸くた秋のくろ 香 良  
拵又世の事さくくえゆる後の力 蕉  
稲蒨つとて小舟系 込 山  
拘の尾房とけく雄の童 雪  
雁氷の志よぬる足跡 蘭  
川涸こりに中りと屋さして 兼  
機咄並しに酒を登られ多く 郎  
やよや待てたかきて送るた書 子  
菓とく人もの人よ怖とる 良

下突

小文庫

修別

山店

おまわさこそめぬ首達お  
まゝお改屋のそとるうこ 芭蕉  
馬酌のこて淋しと牧の野ふ、  
四五千石のねのたてやま 店  
方しへ医者試引とる言は為、  
をくんの他法たももそんえん 蕉  
おまこのころうらまは書はて、  
ほしーるものよ義成やらるゝ 店  
養生に急成やめたる男風俗 蕉  
湿のふそい忠のりゆは南気 店  
丹波くく候もふくて写く馬 種  
常事まらふ川と利上とる世ぬ 店

雲こ出て土器うぐや遊ちし  
た、系中ふかそとえたり 店  
非、つものひつりしてははし 店  
世、そこのやんで気、柱うふる 店  
奥の院とりのし、たとは配 店  
今朝うひひの雪のつく 店  
まの日に産屋のかのつらと、  
かろしや湯漬、管らん 店  
いそつー、これ股立成る並 店  
目、はらもこうに、まふらと 店  
あ、い、さ、標、こや、に、は、う、く、れ、て 店  
併の本、地とほ、く、む、系、た、て 店  
こ、ろ、う、し、と、白、挽、出、せ、は、は、と、え、ん 店  
そ、ろ、ろ、に、ま、の、と、ゆ、る、井、根、標、 店

下九

羽二重の赤くちやまにむがひ 店  
着い、め、く、非、せ、て、す、る 店  
新、城、ま、と、益、う、れ、し、今、羽、分、店  
畠、い、あ、れ、て、山、久、共、の、こ、れ 店  
日、ま、え、た、ん、う、う、下、を、杖、の、と、ろ 店  
う、れ、く、た、の、ひ、ま、の、 一、本、 店  
ゆ、ふ、風、は、浦、生、の、家、も、級、れ、り、 店  
物、よ、せ、と、や、と、こ、と、ろ、う、天、月、 店  
た、の、お、ろ、中、に、井、山、と、ら、つ、て、 店  
森、ま、の、ふ、黒、谷、の、と、ち、 店

た、ち、い、つ、て、

雪、や、年、二、較、し、を、と、

高はるまきりしよ

五月雨より鳥のほろとと寄入

然り

刈こころいまのむか宿の内 利半

ま畑やぬけりふはま中 野坡

浦うせやむしりう権のくれは係 位水

武府をさ出てたはよびぬく

川時よくくはくはくは

夏の夜をたしうはつむいり

張ははや死構も茶のふはひ

晴田派本氏と

五右衛門のまきあせ大井川

夏れ月居由り出ておぼ也

夏日記

高川うまの山田氏

水鏡つと人のいへや佐を泊り

苗の卒をよかたけ 区 露川

朝日よむいへ合帳と吹たて 素覧

進子の内へくしる生もの蒸

さっやあは暖き厚せうら方の秋 川

くこまてはる採ものま 覧

耕作のまみしる初あし 蒸

豆腐あちかき 信濃街道 川

尻衣の縁くごさよー記破り 覧

ふのぼる日かま付ふまうり 蒸

炮板の稿よろくし 壘の足 川

蒲式前あけて門まひろる 覧

さうりまてあちこちへ  
所縁の宮のたこねる 力川  
うとまをたをまの釘ふはひ  
花よこふくる茶髪のあ  
咲花よ二腰ここむを足人  
舟のふいたるにけし由 畑 覧  
山いこころ神の御場を  
社の自由いす日よ 刈 左次  
力取よし思こしよね盆の陰 巴天  
かうとき時の風残凌こむ 川  
三征の念佛にうつる秋の風 覧  
後残よせて門よたぐそむ 考  
我をいふふてまらふ山もはし 次  
筆紙の友のこねうたぐ舞 次

ついで

さてい下戸いよこのちへにみなり 川  
達者自曉のまよまれと 覧  
金剛一世の時のくれさう 考  
けくし小本風の照るる 次  
まのけくやたう小度ふ向の岸 次  
三像つけて馬の 鈴 青 川  
それし小男女もまをさうへ 覧  
よりぬきよむとめをさ 考  
有明よ百夜もかき秋のそ 次  
舞も小回入梅、松茸 次

舟水の宗匠と号する三つ

舟水宗匠と号する三つ



砂川集

落柿舎日記

半流と村のごとく五月五日雨

霽

青葉ふき切梅祖の花 去来

一枝のひらに重あおし合て 芭蕉

柄もこしりもたき服指 惟盛

力教よ芭の海鼠の下ろし 大州

堤下りてい田の中 道 支考

涙しいふよ井系の間を 来

法弁ハ力よ十五盃ある 竹

秋もや今朝うきを給け 然

雁より鴨のことやうまておる 野明

抱いて松山ひろ死有ぬよ 考

あふ人ことよ真ふさ死あり 蕉

下りて

雨乞の志ふうねにけしめて 呼

彷彿うきとくした掃箱のうき 然

極楽てよ死居あぬたのせり 竹

客ととたううに世経にたり 来

道もかき畑の祖の花とかり 州

さるる成終まのむらりぬの 考

撫ねの出水ま下ろすと霞 明

塔よのほりて流るる白き 然

賣よきるる筍搥てとむらん 若

茶酌の雨のりいりか後 竹

この頃の上下の危の危らう 来

腦よ枝とと者なき 遠 蕉

葉ふとふ夕風の飛けきとて 然

ち~~~~(まのむらり知り 明

初の力起したと五六やう  
かゝるふしよ急がしめゆ  
差生よふもしうけつ伏之松  
かけんをせしる海後の桶然  
出来て来る青の深氣にて  
伝ひけりし急ふ髪結行  
吸あてた鼓の音鼓をせらう  
肥後の相場鼓又せてこん  
炭口も花火の連はよそりて  
日くせよふりしまのる風  
市の菴  
柳骨折斤考はし和志風  
方引控うり道中の得酒堂  
山く雀里うりまよ出あつた  
去来

下ノ巻

瀝うけはともる石のれ支老  
力結るはちふくむ紅の端大州  
小繩のれて砂は照り付素牛  
上は忍てとくは後々素堂  
も桶を入るは通りの松蕉  
癩もし食いつものこくにて  
大工の歌アは振成備る考  
牛戸桶の水汲うる庫裡の先牛  
たよりを待て取産利を考堂  
ふり半もわをる雨のちと草  
想く止よまぐるせんそく来  
歩艱を履し給と両方よ堂  
あまてちと探の本の森牛  
力花よふと門と出つ入り蕉

巢おろと四の登る橋板堂  
湯堂に眠まつたる医者の供筆  
我茶の香のほつじとある  
斤口の溜りとろけと指さして  
迎たのむぬ日のあれ 場 来  
うと雪の一人をなげふり 考  
所前い志人と次の田 柴 蕉  
追この細と嵐のなつたを 堂  
隣のぬ屋ありしとつたう 牛  
茶乳の跡で経懐む道公坊 来  
と掛控ておるに牛のこの 考  
川に流れてまを死あうぬ 蕉  
岩よのせたる田上の危 竹  
心方といふ平れぬし北日と 堂

下ノ七十四

種漬よまスどの名代 来  
嘆られよ行つたおとらぬ 牛  
彼君おらけてお度叫く 草  
ふ粉とぬきとも下沈む 鳥 考  
役者ともやうの衣の 薫 来

礪波山集

浪化

管ふ朝日とほあう井枯子  
乳者うはらくまれ静と 去 来  
やふ入の土産似合ふこしらて  
又時のつらよあるうなる 空 化  
巨燧切らまると道 言 け 力  
ひろひふ城丸口と借る 来  
猿人の鏡を買う 田舎道  
かひこの真と六方の未 化

来たる細城一と引ちらし、  
 小屋敷ふらふ城の裏町来  
 云分のちふらと起る危道す、  
 梅咲そりてま花をちとと化  
 年中城ねの内より新理くひ、  
 伊勢の吹日いそうしれま来  
 上緝の本綿合羽に傘はして、  
 湯屋の手透のハワリあり化  
 名前のもやうふかたーあひ、  
 一かともふと糸まは切物 芭蕉  
 玉味等の伝濃よおる秋の風、  
 不足ふ寺が夜を醒よ持とる 来  
 右のよれふるい流舟に流うと、  
 煮りけてやる相役の み化

下  
 下

け者城こめひして通る船の軒、  
 昔田うのひしてうまのうせ 来  
 平りふるる城みまうの水場、  
 給仕とさせて馬まう食うと来  
 有うしれおの塩柄と星てる、  
 聖霊棚いよはと空能 屈化  
 志のふら成涌よ出ると思せて、  
 来てくからうは去年の停業 来  
 系宮といへ盗もやうーらう 化  
 ちいしと朝自にむうへ接をら 来  
 養とたる松うらひのまこほれ 来  
 四五人通る信も来ふら 化  
 薪と町のふともの替を能 来  
 いつしとまふと世の中 来

朝衣ふとんぬきすし凡の尻  
六月甲時ふをまかめし山  
階階や浪ふちうとむ青松雲

鳥之道

本節巻し

芭蕉

秋衣ふとんぬきすし凡の尻  
まころふふせる抱ふれはゆ 木郎  
力跡る抱ふうの火乾すそ 惟然  
疑るく澤よ下る台 管 支老  
降るまきる丸雲くそ水のまろ  
まほひふいて抱細くそ 蕉  
夕飯と食いて隣の服とま 考

芭蕉

何の箱しもしれぬ大死と  
看して涙のかりる泣かそ  
うららけ 登りせくるひらり藤 節  
佛垣の隈ふよ方のさうわり 然  
梁くくくその落る秋風 考  
ハ朝の礼いそく (仕立り) 節  
舟先の簪の時ふらうつみく 蕉  
西風深ハ地早ふあれ出る不 考  
おきりよとくら ~~三~~ 有叶 然  
後うけて細繩足らぬ花の垣 節  
足袋ぬいて干泣直れ湯を 考  
年礼よ女さ記やつと供さそ 蕉  
隠すたうりとまふらうとすく 節  
刈乾の上うりまろね顔つと 然

五々よびの芭とてつらうとてかく蕉  
中野ハ四面より雨城なるやうに考  
井の根成りありのさうし然  
まうしとて京の枇杷とては連節  
嫁と娘よこるに成こく考  
客ハこれさびしくて紫の巨魁の旨蕉  
直こと小くもあこつたあり節  
髪結て番又出の日の朝方お然  
木よ十とてつらう拵成たかむ蕉  
満能を中稻仕わけに食条考  
桶もからひもつたじ死た然  
扱うちとてつらう猫の道あり然  
首よ扱とりみる拵除日考  
花よて葉つとてはしめる裏山然

下

ほくしの肥る赤土の岩然  
續猿蓑

夏の赤やあまてぬ冷お芭蕉  
をぬいたらとて蓮の扱え曲翠  
管ハいつその後又音成入て卧高  
古記羊蓑よ反古ねい惟然  
力能の雲もちりよふもれを支考  
志やよて勢成なるやうに蕉  
猪とてつらう揚の介へ退ふし翠  
山うらるよ名とて出し出と高  
飯扱ふる面桶よとてむ打強然  
鳶てユまとてつらう照り降り考  
おのう事つらうに瀆う拵は番蕉  
拵佛のよとてつらう日とて返翠

平畦よ菜菔蒔き一たをこ跡考  
秋風こたる門の居風良然  
馬車で賑はひそむる方の孰高  
尾張で付しことの名にふる蕉  
解ぬのこころこれたあつたれて翠  
正力そのく徳もよことと高  
去風ふ普請のはたついとす之然  
菽うら村へぬけるうら道考  
食うのぬ舞も男も口利て蕉  
何その所へ山伏よふる翠  
笹芭と指よ附たることと箱高  
蕨こころる所月形いと兼蕉  
お高とたえにまッ夫木の町考  
際の日およ雪の氣をひ然

下りま

吞くろろよとせぬ酒の引流し翠  
恙うのふんね一あつくる高  
身付し各箱来たる方の言蕉  
そろし歩りく盆の上藤丸考  
去勢流る四條の角の河原町然  
高深とあくる表ま固翠  
今のろふ巻とつらうは穂の上高  
大さね袴のどんふやゆも然  
さころふる花も扉おれをて考  
腰うけつみー一履披の下高

をきまの座の板と掃るよ

涼しやすよおの枝の秋  
ひやしとをきとふらとてをわが

七夕中秋を定るは一りの歌

金言

家ハこれ杖又白髪の色あり  
いふつる和園の方ゆく九位声

壬生山家

聖翠

つふしり帯杖もろく板の毒部  
井のまつれと初あらしし吹  
朝方又熟ささこ一尾とふりて  
それいこころお豆腐くれ切  
大への通りうぬころせよ小落  
昨まの顔又編笠も忘れ  
漣るうろ水仙ひらく川おきて  
世中へ平を恨むとさき

惟然

土芳

雪芝

後峰

芭蕉

泉袋

九節

嫁入の来て娘うれ門まわり  
杖と草履をさしりて  
一ふらみききとさたる月夜歌  
縁釣るあり寝念の浦  
不鳥のころりて因も細  
昔ま務とあふ惟ふれ汗  
五ふりうみおとておくれ携  
後持手うて祖母の泣る  
中人丸又花の本法のかやく  
どこやうきおれまふれ小  
松花屋にをむむう鳴いおま  
ふらひのころりたよ成巻る傍  
冬うしの九幸母おむむおま  
たよりしころり居風長の漏

共

翠

然

雖

蕉

袋

雖

蕉

芽

雖

芝

袋

蕉

芝



持徳の一才ふにまづりくひ翠  
あはうはつこいひれつうを向  
言の口入るれたう道具市節  
茶のぬるところのぬる糸茶権  
然 ちうあはれ又いふうある法  
兼 ともは年よりあふさうの放  
蕉 有めよ志はしこて馬と竹  
袋 意時雨より頭痛やこたり  
節 引たてくるちふしこまき  
芽 へとりたまうにそこぬ古  
井 芝 ぶらりしとこせうに付る  
貝 然 へんりここめれはくく  
朝 然 ともりしとたの波ふる  
まよえ 翠 柳にやうる玉子の  
もみ 松袋

後維亭

後維

られしこまは海り野ふるれ  
雀のかりらとあふ粟の穂  
穂 色蕉 柳方未駕ふやうやく  
返 付て 配方 茶のりうたけ  
暖 庵のひま 望翠 かつたりと  
招きあふに雑水取 土芳 氣  
屈こころに捨 てる 卓袋 鴨  
差の小こたおまのやめて  
蕉 名主と地下とまこかなる  
利 雖 鏡飯を割こも中の冷た  
さい 翠 ねもひぬるに  
出ぬくくわり 芳 ちん  
ハ麻の要はふらふし 袋 湖  
水の面力ぬえくくは 茶 煎  
服さうの小尻の衣と松袋  
り

角カよへんこしともしはし 雖  
 山陰ハ山伏付の一うまこ  
 くつ凡こころ 軒のぼの果袋  
 焚きこし柴ころりふりたの花芽  
 土うねころりまの風とち 蘇  
 坪ころりの川除の石はこ上ヶと 翠  
 田ふさしくに風とくりあへ 獲  
 大まの供の長との果もまに力  
 むうのの靈のおころ血の通 雖  
 一升ハ代きもこまぬ酒の粕 獲  
 たらふの庭かまぬうとすも 翠  
 燈と華を 佃ユの扱ひ文て 芽  
 鮠のまの 扱もこのと力  
 こころころいよりのぬまこまぬと 獲

下がとひらの一とる三ヶ力 雖  
 神ま、神供と扱て上らる 翠  
 志ころく春よ体む 袋土 袋  
 衣まて扱とるこ 洗静く 蕉  
 加がへしいる 草のふりぬ 芳  
 耳まの 扱とるころり 申に 獲  
 川まのころりこ 雇ひ六又 翠  
 大ふりふ凡中 扱とる 花 力  
 茶の潤子のたるむ 二力 獲

雲芝

残り扱よ捨とてぶらう 扱とる  
 餅 舂ふころりに 扱とる 扱 扱 色 蕉  
 中ふ力よひうの 扱とる 扱とる 土 芽  
 うと材よよ 扱とる 扱とる 風 芽

身とそいり二人つと互在る  
こふちうけをそのゆふの  
練萱孤目利の内へ行付て  
けりてそとと門の罅に芝  
大木の指の枝のちむみり  
野の夏としくころけ依お芳  
山伏も終かつてきて配る蘇  
一里行ても石をとる猿虎  
かけおの布袋の思ふ方にて  
石の灸よとらしくと  
秋うでの雨やうしと川の上  
歩りし路の船とやう上る  
夷侯山のあられたのまをひ  
とてし利あしまの頰礼獲

下

ま紅日の西よ来たる如目振  
あられよぬう雨のま  
のこねぬや余あうまぬ冬  
紫たく陰小枝よあとうら  
寒井の枝の節よむ老の  
まうぬ山路とこふやうせて  
言うより寺はえ返の高  
とく死の陰よとてら  
ひけふきや方小枝う  
夜道のいくれとけうの  
おといけう海うらふ  
おひとら夜よはくひ

名月の花うとて

名方よふおこのちや田んぼり  
くさるこれしめかたも十六里

斗後二山山成て

斗後二山山成て  
山産のことやして巧まの輪 斗後

俳諧集

おまやらぬまのつらつら

菅

秋の日おいあてかこやう 衣代

春の力に魚の通と中流よ 文考

こころいさけて郷のうり家 雲芝

四五人てあふぬふふ結ま 猿雖

いさししゆま結成星こひ 聖翠

今朝の雪はけいもたつらと 惟然

下ノ半三

展風たぐんで膝とさるうり 車壁

あくしよ上加茶のどころこ 代

あふの危こそりの念こる 考

嵐や蒲室のうの乳索るく 芝

田よありくわハもの 鳥 雞

いさししゆま結成星こひ 聖翠

三年立てと嫁よみのふと 煮

危きの向こり人よえらせり 袋

那もも果ぬ佛ありはく 萩

初冬の恒のふる井結まはし 然

通こつらぬ力の機と代

とらりしと結まはふきの柿されて 袋

春う谷へも豆を煮りたり 考

年切の少といれよ角と入 雞

居風呂の湯のうり加けん子  
二三か牛切りた水いかに  
重岩の蛇籠から八番小巻  
酔不れて枕すたる雪の狐  
花さつしこと附しり仙  
味覚賣のさるあしに考後て  
本跡松蓋まにと山にり  
ありめまか家の叔と意は色  
亦子細よんさるるあしり  
この秋ハ暖の腕とわつしひて  
俗と俗との花のをさるる  
呵る何どよふ焚付ぬ竈の下  
芝切入て馬屋きりける考  
くねとじと行組のいふ  
雖

下ノ全

まの日向よ屋のまゝと  
代

俳諧集

芭蕉

秋の叔然うちあがりたる新井  
力やうの月といふ浦を身に巻  
西の山とこれ三強雁鳴て  
ひらりたる牛のよく動くこ  
舅の名やんまといふ性者  
小袖狐出してと妹たるたし  
後やうをいふことおとせ  
こゝても医者のおんを兼ね  
掛ひと懸しとの柱さうしと  
考て揺ちる舟の  
乳より運谷うけて  
すききふくむけいんらぬ  
考

車庸

酒堂

遊刀

諷竹

惟然

支考

蕉

廉

堂

刀

考

麻のこぬねい若葉う百れ損 然  
る葉の力よ細よ川 翁  
大蛇しそ葉降と下る誰う皇 蕉  
七種すていよろつ傑かき刀  
えせ馬の尾 舞の苗花やこれ 堂  
小屋形ふくぬ金枝の 春 然  
密掛色  
松風よ新酒とこまたあそ部 支考  
力もさふくふ 恒の上 猿 雖  
町の角追そく麻の飛こえて 色 蕉  
きてい流衣の裾と引とる 雲 芝  
牡丹しんおほえをふりうらと 惟 然  
けふうてはくくそ流すの 卓 袋  
藤相ふる葉根の尻の切なり 望 翠

下ノ八五

床て天窓減こそくし判 考  
夏比を備し雨の待とよみ控 雖  
喧笑の中城を醒よ引のけ 芝  
仕合と矢指の舟と乗ぶふと 蕉  
あふけと解の嬉れおつる 翠  
せうしとほ子を舞よつたて 袋  
大工家根底の帰るうれこ 然  
用のある所いっけ込敷とあり 考  
雨の降る日の節句ゆやう 芝  
とハ墨紙墨連してし引 袋  
親しらふ字とあつて幾 秋 考  
力孰よ又うり返すせめ 翠  
借りたふとんの跡の冷やう 雖  
咲花よ毎年くふと連 許 然

陽炎うけてほよに振けく 蓑  
幸と獵のはしめれ紐子うらて 芝  
内依の苗まにるたあいろく 考  
送物の門のこし入たぐさの 雖  
一里の舟も腹のすさたる 翠  
山をふ蜜拵のまのまにありて 蕉  
石ふれてかふる宙の露をね 考  
母方に離きて方のもれ淋し 芝  
嵐の巻る巻葉の中一 蓑  
傍草の髪を結ひかへ微の雨 雖  
さうふ出をばと洵は清く 芝  
小倉とハむらひ合せのつれま 然  
そ交の風は人死うある 考  
永貞と千日寺の粥喰ふて 蕉

下ノ字

齒うけは足跡の雪小埋れる 雖  
やうりに今ハ海ふるみ留銀 翠  
加減のくもりあつらうと致 蕉  
濃紙をまらめてこれいまたみ 考  
こ月れて生る朝のむけし 蓑  
朝ゆふの茶湯をうると原の葉 雖  
釣ハ流舟よ舟のほやほく 芝  
枯もせをふらるともかた楠の枝 蓑  
力こよいつも道能せらる 考  
驚もゆらうとすむ秋の風 翠  
後の小家とそくる音 然  
懐よとらうとせきとけけ 蓑  
いろこの露よ白をな腐煮る 考  
雪原の窗よりあそく花の枝 雖

根を以てひは雪のふく芝

刈秋やの成ひうけたる栗のへ

あつて

菊の香やあつてふたは佛蓮

ひいとつらぬく急也し叔の麻

くかり作

菊の香よりうらりやう節句歌

葉よせてふくとかよも能方友

こころ

芭蕉

舟 買てふ列がり方又うれ

秋のあらしに奥をうれえ

畦止

家のある野ハ刈跡は花まで

惟然

下八七

いほもの癖よこのむ中服 洒堂

はころふらうて土用とくじぬ 支考

援の枝とれろしとたう 之道

溝川よはけかく登成りてる 青流

火のとほりたる亭れつたあけ 蕉

其使

所思

芭蕉

は道やけ人ふしに秋の香

酒の島の木よめくる 葛 泥足

力あつむきまればいれよを風味て 支考

小とれたおと出てあ 汲 游刀

天香おぬ織と入てる拵へ 之道

酒て痛のとすけ服くせ 車庸

かたはらふ節句れをまき終り 洒堂



囀のまほひよ赤と梅ある 畦止  
線香七五のまよこの伽よふる 惟然  
あ比頂の條のある二方 龜押  
兵の若とる我ハぬうしれす 足  
かくさた年になしる松風 蕉  
くくしと山岡の稻ハまぐれて 庸  
地氣の埋る秋ハふふいた 考  
仕るふささの糸にひる羽の片 道  
鹽飽の船のくくしと入り込 然  
あなる花よ鼻の芝引吹きて 止  
流傍日まよと医者の人くさ 堂

猿懐

心秋や何てくくしとまをたを

下八

浮瀬にまをたをたを

松風の朝吹らくくして秋をね

葉の巻

園女亭

あし葉の目ふまてくる葉もか

芭蕉

知葉よあとなふに朝方 園女

冷しと朝の行方をおまけて 諷竹

何くもせとよ年いられり 渭川

小襖よ座右の徳ハ嫌ひくり 支考

とやことをちめてましの徳 惟然

めしたさう秤小張たうてら 洒堂

袖ふさくくし親の名代 舎羅

恒越したちうるとたらぬれりて 何中

普清の内にお屋て大坂焚 蕉  
帰らぬは極まる後の法を海し 園  
洞穿つて故早稲の掬 初竹  
とれしと力の出くる枚の表 川  
取法引たる町着の 秋考  
とれたやう漢くら連るはふ院 然  
彼岸のぬくことこれかすふ 堂  
青芝のぬよもいさうふんの花 蕉  
出代<sup>三</sup>時のまきあたりかむ 中  
通ひ法を摸ふあふぬい送入に 竹  
去ころにふかす奥の庭 桂川  
あふしことさたぐりたきの堂 堂  
雪のくいのふよふる 風園  
紫雲よ隣の子とも連たせ 考

下ノ

清花はよ取のあつむあり 蕉  
上下の掬れ流たう川の青 中  
う急田の中と春時のさほく 蕉  
小うすくよ不巧と権くあふり 園  
結の仕出りのくやう中機 堂  
力教しきく作をば取の去と 竹  
杖まき本と通の服さし 中  
世々しはのそれも社のみうを 蕉  
老のちううに娘はし 可  
條ちさる鍋のらうれ張さ 考  
みへうぬぬこの積でこのける 園  
田のあらの注連にふるた堂 堂  
杯のう一本こころのふり 然

人夢のやけなうへる杖のふ  
秋もくやうらつく雨に力の形

花屋のくしこ

藤よ二病てまは枯れどかけら

その病の致すこほをよ

出る舟中

ふよ病て花物のつらやを死 去来

舟中

白粥のたやうりまをやを死

舟中

木枯のそらうまはむや鶴風

屋つこやかしも水しくおまめ 木節

起さうまもうれに湯浴敷 支考

お雪ふやうま引人杖を杖 正考

下九

非のろすたのこちや松のうせ 之道

味くた鴨のさけうや位と舟ひ 支草

月がやうこえすたにるこ糸の糸 乙用

まららに竹の林やうそそい 惟然

女井く鶴と招うん時ふお 其角

病中

うつくやう茶のうけまうれ 支直

まうれつ涙のうへ出るまうれ 支考

正加

公羽脚句

。松の雪が今もこのうらけ 相葉

。藤一つりねはは、こゆく

。我さうく転こく枇杷の度素 秋風

。えようこく山 夏の花

。月花を雨のなまのきよき 露沾

。蛙のこくは牙成入る声

。後衣子苗にほくむ含えん 曾良

。後衣のほく、こわやうおらすお

。こくこくおははは怪鳴心の雪 會覚

。秋のそりといつり三日力

。こくせくやれ花は成ちる朝の畑 惟然

。どの素が、まよとく入夕花

下年

。秋のそりゆくえくの若をくれ 小園

。萩よ麻やう、う萩よ麻やう

。芽出より二葉に成る柿は美 文章

。畠のちりよかいる卵の花

。いろいろの名もすたらりしはれま 珍碩

。うたれて際のはいさめぬる

。夏料ふあつと路中(五)日 和足

。まもてとやす宿の卵の花

。おくや雨をふさつと萩の身 雪芝

。くふすところには居ぬねじ

。色色世か其のなま転(は) 季下

。かともとら成はのを食

。宿中あつせ入西行あつと秋は言 雷枝

。とせ成と各人風の破うと

。花の受方ふらまのそぬうれ **勝延**

秋うーはるく蝶のくこをれ

。山のさうく音拾い木ふれ **峇山**

鳥よやねの整 正十一 **露川**

。やううに禁よんじは地妻 **露川**

田植くもふ縁の朝 記 **雅良**

。我もさぬの梅より夏れ夜つれ **雅良**

。茶の湯よのころ雪れいよち **如行**

。そねまこと縁ぬおぢやぢぢせ中 **如行**

。人かやうの扱のころかし **如行**

。兼程丁辰じろの雉や夕凉 **典翠**

。さるるふゆいんちさの花 **典翠**

。さき茶の隣もつりや夕大根 **許六**

。きさーやゆるふさの蝶 **許六**

下三

。さ風やまの中ゆくまのかと **木暮**

。かけろふいとむ花のいと **木暮**

。まろーそそせとやうの田植唄 **巳百**

。まあつたれん不破の五力雨 **巳百**

。たぐ屋もふくてま本の梅和 **露川**

。小春よ首のうこくこの心 **露川**

。時雨てや花をよる梅並 **園女**

。霜ふさうふとむらう **園女**

。梅たえて日永し梅今日湖春

東のさきの春末つく蕉

巢の中小燕のつゆの並ひあて

。雨ふれて栗の花さくたえが 桃雲

いつれのまに鳴るる蝉 等躬

夕餉うへ給、外面より出て

。青やうたふらひくうら草 等躬

市のまじりのさたの細布 曾良

日表、こまをぬらふらう涼にして

。長系と布まじりつらも三々一 利牛

うちくしやく紙の細くく 盛水

差よたつき葉のははと切れて

。差のかけうらむたあしや 荷与

下ノ本並

おとや掃ん庭のけくきく 落楳

七夕の八月いもわくまひくく

。年とすれさよもれたせん 酒堂

孫よのせたる路色の本 祐 妻堂

そ月の力うくある人よ宿うて

。ねねよすくひあけたる英が 去来

後ねりうらゝあるたそくれ 許六

ひこまゝに孫はるおまはす風呂

。まゐるやふあさこすれ一途

二人しつゝいさふふる 凡

歳物の麻のされうらまゝい

さつしつ

赤(し)と名月のおや紫紺山 桃青  
 肌を(し)としてかり 忌 紅る 立圃  
 秋の(ま)の(こ)れ句ひ(う)麝香  
 ほ(う)ろく(ま)れた(ま)れ(こ)や 青  
 か(く)は(う)り(ま)の(入)たる 高嶽舟圃  
 (う)へ(し)一(日)輝(の)ぬ(く) 推青  
 有(あ)り(し)五(里)往(出)る(家)童子 圃  
 老(い)ふ(ふ)し(十)念(と)の(う)り 青  
 水(仙)の(こ)う(う)と(う)と(う)の(神)を(力)圃  
 紅(か)統(やう) 常(じやう)盤(ばん)あ(う)り(り) 青  
 登(のぼ)られぬ(大)内(の)山(の)后(の)孫(の)圃  
 五(ご)と(ら)し(し)と(う)の(郭) 圃  
 ち(り)り(り)の(尻)松(は)く(る)川(後) 圃

下(下)五(五)

紅(く)て(こ)西(し)り(い) 圃  
 秋(あ)の(て)の(煙)に(た)る(ら)る(茄子)圃  
 花(は)火(ひ)と(ほ)し(て)星(星)圃  
 碓(す)埜(の)と(横(よ)の)中(な)う(る)社(の)方(方)圃  
 狐(こ)の(歩(あ)り)く(足(あ)き)も(を)根(ね)圃  
 真(ま)篋(け)寺(じ)と(ま)へ(ハ)を(名(な))と(醒(せい))圃  
 伯(はく)本(ほん)賣(う)り(て)煙(えん)る(白)圃  
 北(きた)袋(ふくろ)の(秋(あ)の)尾(び)に(掛(か)たる(こ)れ(竹)圃  
 沙(さ)石(いし)と(讀(よ)り)て(ま)と(不(ふ))思(し)議(ぎ)圃  
 精(せい)進(しん)し(る)い(返(かへ))る(蜂(はち))圃  
 都(と)を(ち)て(え)る(江(え))の(舟(ふね))圃  
 三(さん)つ(痛(いた)く)む(老(ら)の)海(うみ)と(志(し)賀(が))圃  
 中(な)か(け)し(と)戸(と)と(叩(たた)く)風(かぜ)圃  
 布(ふ)袋(ふくろ)と(彌(や))勤(きん)井(い)の(化(け)身(み))圃  
 青 圃

鯉のうろこい 三十六頁 圃  
仙人よ来る事もこれ秋の青  
その糸くしいお本城 菊圃  
ひらこたのまねくこころの桐やけ  
け川こそさうた人よまゝ人 青  
みちのくれみりの石もさうあれ 圃  
かく抜く世と催いろん 青  
花も名よふるこゝか後を歩 圃  
能くもたよりさる砂の 松 筆

お徳撰吟  
おのこれ 名をえ小まら序に  
約丁の添と 知てり 松

下

几中日のちりくしようつらへて  
力行これい 陸よ 備たり  
礎い 唯あつたれ 叶紅葉  
世とて 案山子を居て 守  
ころしとや 陸の陽めく あり 塔  
霜小うけおの 後ふるを こ  
一備 ちとふのら 叶森の中  
との 取くく 叶 浦る 叶 たらそ  
もくしよ 気の 叶 津の 叶 たりや  
もも ちと 川と 本直 流れて  
つれ えて 様と こと 味ふと 丁の 声  
力よ ちと ひと へ 面うら  
かく ちと の ぬい 君の ぬい ちと  
んの水よ ちと ちと ちと ちと



花あけの狭き路の徑所  
蝶舞へしてつらき路は是  
陽出の移る所を離れ  
几帳よもたれいまを明り  
得いぬは位よふは懐を  
又と布せよむとふし  
うきふしとて討ひの勢に交れ  
ふりし心を道下と 見  
床是やら何やら淋しき  
記念の袖はは指先  
馬場敷の本程あはれ  
核皮と積よるへぬ  
朝もよひ紀貫之の三す  
類一行り朽跡を

丁卯大

きりとりはすくえぬ  
屋のち後の眠とかは  
まの約ありけふう  
吹雪の袖をふる人  
松外の実加と買人  
膚巻たるあつとれ 霜

冬



